

私たち(被災者)から 皆さんに伝えたいこと

いち にち まえ
~「一日前プロジェクト」報告書~

平成24年3月
内閣府

はじめに

『一日前プロジェクト』は、多くの方々の協力を得て、開始から6年目を迎えました。自然災害の恐ろしさや災害に備えることの大切さに気付いてもらうことを目的に生み出された物語は、今年度新たに誕生した103篇を加えると約650篇という大部となります。

昨年3月11日に発生した東日本大震災では、大規模な津波により未曾有の被害をもたらしましたが、津波以外にも、地震によるライフラインの寸断、大都市での帰宅困難、さらには液状化といった様々な被害がありました。

普段何気なく過ごしていた日常から、突如として非日常の状況へと変わった戸惑いや恐怖、またその中で生まれた助け合いの行動などを、皆さん自身の言葉で話してくださいました。

また、昨年1月に発生した霧島山(新燃岳)の噴火及び山陰地方を中心とした大雪で被災された方や災害対応に当たられた皆さんからも体験談を聞かせてもらいました。

これらの貴重なお話をたくさんの小さな物語に変えました。物語をわが身に置き換えて読み進めば、いつどこで起こるとも限らない自然災害にどう備えておけばよいかのヒントを見つけることができるでしょう。

これまでに作成された物語は全て、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」に掲載しています。物語やイラストは、非営利の目的であれば自由に使うことができますので、地域や職場、学校等で防災について考える際の教材として、また、広報誌やパンフレットの素材として広くご活用ください。

内閣府(防災担当)

災害被害を軽減する国民運動のホームページ：<http://www.bousai.go.jp/km/>

目 次

I. 一日前プロジェクトの概要	1
II. 平成23年度実施要領	2
III. 「一日前プロジェクト」のエピソードについて.....	3
平成23年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧.....	5
編集後記	112
物語を集める	113
一日前プロジェクト みんなでやってみよう!.....	114

I. 一日前プロジェクトの概要

■「一日前プロジェクト」とは？

「一日前プロジェクト」とは、被災から一定期間を経過した被災者・災害体験者のみなさまや災害対応経験者のみなさまにお集まりいただき、「もし、災害の1日前にもどることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに、

- ① 被災直後の行動
- ② 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ③ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- ④ そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

■「一日前プロジェクト」誕生の背景

わが国の経済を支える壮年層は、日々の仕事に追われ、防災教育を受講する機会や防災に関する情報に接することも少ないため、自然災害の恐ろしさを意識することなく日常生活を送っています。しかしながら、万一、大きな災害に見舞われた場合には、家屋の損壊や家族の死傷、仕事を含めた生活基盤の喪失など、経済的にも精神的にも甚大な損失を被ることが予想されています。

教育課程にある若年層の防災教育もまだ十分とは言えませんが、これら壮年層に対する防災教育の仕掛けづくりには若年層以上に難しい面があるといえます。地域のコミュニティや国民一人ひとりが日頃から災害に備えることを目的とする「災害被害を軽減する国民運動」の中心的な役割を果たすべき壮年層の災害に対する関心を呼び起こし、防災・減災に向けた行動や、災害への「備え」をうながすきっかけになるべく、一日前プロジェクトが誕生しました。

Ⅱ. 平成23年度実施要領

	対象災害	ヒアリング地区		ヒアリング対象者	ヒアリング実施時期
1	山陰地方の大雪 (平成22年12月～ 23年1月)	島根県	松江市 安来市	住民、電力事業者 行政職員	平成23年11月
2	霧島山 (新燃岳)の噴火 (平成23年1月)	宮崎県	都城市 小林市 高原町	住民、企業従業員 消防団員、学校職員 行政職員	平成23年11月
3		宮城県	仙台市	住民、企業従事者	平成23年11月
4	東日本大震災 (平成23年3月)	東京都 (施設関係者)	東京 23区内	消防学校職員 大学職員、企業従事者 商店街振興組合	平成23年12月 平成24年 1月
5		東京都 (帰宅困難者)	東京 23区内	団体職員、企業従事者 会社経営者	平成24年 1月

Ⅲ. 「一日前プロジェクト」のエピソードについて

「一日前プロジェクト」のエピソードは、国民一人ひとりが災害に備えることの大切さを自分の事として受け止め、それを行動に移すきっかけとしていただくためのエピソードであり、多様な場面での活用が期待されています。

「自分だったら」「我が家だったら」「我が社だったら」というように、自分の身の上に置きかえて読み進めてください。

また、最初から順番に読む必要はなく、年齢や性別、家庭や地域、職場などにおける役割など、自分と似かよった立場や境遇の方々のエピソードを拾い読みしたり、興味のあるタイトルにひかれて読んでみたりなど、自由に読み進めてください。

一つひとつの小さなエピソードから教訓などを感じてもらい、減災の大切さを知るきっかけとなれば幸いです。また、「おもしろい」と感じたエピソードは、ご家族、友人、ご近所、地域コミュニティ、職場の方々などへもご紹介ください。

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

エピソード No.	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ	
1	地震・津波	おばあちゃんが残してくれた“備え”をご近所にもおすそ分け	東北	家庭	東日本大震災 (平成23年3月)	9	
2		緊急時の家族との決め事が大事！				10	
3		災害対策ゼロの自分に気づかされる				11	
4		自宅も職場も普段の備えが必要だと実感				12	
5		備えのない一人暮らしを反省				13	
6		直後の判断での買い物が功を奏す				14	
7		電気がない生活に悪戦苦闘 ～懐中電灯から携帯電話に充電を～				15	
8		被災地では携帯電話は繋がらず ～他の連絡手段を決めておこう～				16	
9		病院の毛布一枚のありがたさを実感 ～身重の妻と車中で過ごす～				17	
10		寄り添う人がいることの素晴らしさ				18	
11		係員の的確な避難誘導に感謝				19	
12		近所のスーパーは長蛇の列！ ～3時間待ちで食料を手に入れる～				20	
13		自分より他人を優先する素晴らしい友人				地域・ご近所	21
14		仲間の大切さ ～スナック菓子やパンを届けてくれる～		22			
15		ボランティア精神の素晴らしさ ～トラックいっぱいの物資を被災地に届ける友人～		23			
16		やっと繋がった実家の家族に無事を伝える		24			
17		友人との情報交換・役割分担で協力体制を		25			
18		毛布持参でホテルへ避難 ～お米と炊飯器を持ち込みご飯を炊く～		26			
19		仙台港での信じられない光景 ～自分の車も流されていく～		27			
20		忘れられない3.11 ～スタジアムのスプリンクラーが破裂して水びたし～		企業・職場			28
21		無我夢中で運んだ仮設トイレ ～もし妻や子どもがいたら？～				29	
22		冷静で礼儀正しい帰宅困難者 ～トラブルなく、ゴミも残さず～		関東		帰宅困難	30
23		同じ災害は2つとない ～始まったばかりの帰宅困難者対策～					31
24		情報があると安心 ～スクリーンでニュース映像を流す～					32
25		商店街のメンバーで帰宅困難者に炊き出し ～心も温まったフカヒレスープ～					33
26		イベントの最中に地震が発生 ～自宅への道順が分からない方をサポート～					34

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

エピソード No.	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
27	地震・津波	電話が繋がらずに走って確認 ～避難所の場所が分からない～	関東	帰宅困難	東日本大震災 (平成23年3月)	35
28		震災の4ヶ月前に危機管理マニュアルが完成 ～非常時の対策が功を奏す～				36
29		乳幼児に必要なもの ～ミルクを作るのに必要なお湯、そしてベッド～				37
30		校内放送を使って避難の指示 ～落ち着いた行動で怪我人はゼロ～				38
31		備蓄した水と食料、そしておにぎりを配布 ～全員が協力し合ってトラブルなし～				39
32		清掃業者の協力で清潔なトイレを提供 ～避難者のマナーもありがたい～				40
33		一番要望が多かったのは情報 ～スクリーンでニュース映像を流す～				41
34		錯綜する情報 ～ホワイトボードに仕入れた情報を書き込む～				42
35		携帯電話での緊急連絡をシステムを構築 ～公衆電話が使えない学生も～				43
36		帰宅困難者受け入れへの不安 ～秩序正しく行動する日本人の姿を見た～				44
37		空港ターミナルがもっとも安全な場所 ～館内放送と職員の声かけで誘導～				45
38		マニュアルに基づき地震から1時間以内に対策本部を設置 ～自主的な判断も重要～				46
39		行き場を失った旅客機 ～ジェット燃料がなくなるまでがタイムリミット～				47
40		携帯電話の無料充電サービスに人だかり ～目に見える情報をいち早く提供する重要性～				48
41		タクシー運転手同士、無線で情報交換 ～運転手に空港へ戻るようお願いして回る～				49
42		安否確認ができなくて心配 ～できる限りの情報提供で一安心～				50
43		冷静でいられたのは、不安を煽らぬラジオのおかげ				51
44		東京駅周辺は、危険を感じるほど大混乱				52
45		携帯電話のアプリで、電車の運行を確認				53
46		急遽始めた携帯電話の充電サービスが大好評				54
47		次々と小さな目標を立てて歩く				55
48		「休んだら歩けなくなる」との恐怖で、ひたすら歩く				56
49		見知らぬ人と、励まし合いながら歩く				57
50		一瞬、高速道路の崩落を覚悟 ～どうにかバスを停車させた場所は、橋の繋ぎ目だった～				58
51		大渋滞で、救急車が立ち往生 ～マイカーの使用を控えるルール作りを～				59
52		東京都庁の33階で震災に遭遇				60

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

エピソード No.	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ				
53	地震・津波	体力に自信がなければ、無理な帰宅は慎むべき	東北	帰宅困難	東日本大震災 (平成23年3月)	61				
54		パニック障害を抱え、大混雑の電車で帰宅				62				
55		過去の災害番組で得た情報が活躍				63				
56		私が帰宅難民となって、気が付いたこと ～被災した時は仕事場に留まる～				64				
57		本社の避難場所を知らず、皆に迷惑を				65				
58		今、流行のゼリー飲料は、非常食にもおススメ				66				
59		土地勘のない場所では、携帯電話のナビだけが頼り				67				
60		電車の中で大地震と遭遇				68				
61		液状化現象を津波と勘違い				69				
62		遠くに住む第三者を介して家族の安否確認を				70				
63		病院のベッドで地震を迎える				71				
64		火山				あったら良かった防塵ゴーグル ～今も舞う無数の灰～	九州	家庭	霧島山 (新燃岳)の噴火 (平成23年1月)	72
65						慣れないことばかりの避難生活 ～洗濯物にも一苦労～				73
66	認知症の母と離れて避難 ～もしもの時に備えよう～		74							
67	鹿児島から来た作業車のおかげですぐに使えた主要道路 ～受けた恩を東日本の被災地へ～		地域・ご近所	75						
68	近所の人の声かけが一番! ～消防団員は避難の呼びかけと地域の見回りで大忙し～			76						
69	1ヵ月かかった灰の除去 ～支援のありがたさを実感～		企業・職場	77						
70	子供の安全を第一に ～登下校時の噴火に備え、避難場所を学校が確保～			78						
71	噴火よりも土石流に警戒 ～梅雨前の灰の除去で不安をめぐう～			79						
72	今も続く噴火への警戒 ～お客様の安全が第一～			80						
73	牛舎の灰下ろしは地域の若者にまかせて ～牛は知り合いの所に預かってもらう～			81						
74	畜産農家を悩ます土壌汚染 ～例年と違う稲のでき～			82						
75	店舗の提供をうけ、販売を続ける ～洗っても落ちない葉もの野菜についた灰～			83						
76	とつぜん襲った地鳴りや窓を揺らす空振 ～「安心して」と利用者へ声かけ～			84						
77	灰で新車が台無しに ～毛布をかけて被害を防ぐ～		85							
78	保険がおりない天災での被害 ～保険特約に入っておらず約10万円を自己負担～		86							

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

エピソード No.	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	ページ
79	火山	真っ白になった勤務先 ～8人で50日頑張った灰集めはトラック30台以上～	九州	企業・職場	霧島山 (新燃岳)の噴火 (平成23年1月)	87
80		窓を締め切った生活 ～灰とともにウイルスの恐怖も～		行政		88
81		アスファルトを覆った灰は土のう1000個分 ～延期された二輪車教習～				89
82		過去にもあった大噴火 ～また住めなくなるのかも…～				90
83		普段の繋がりがスムーズな避難に ～県外からくる人の対応に苦労～				91
84	雪害	停電で浄化槽が使えず、道の駅のトイレへ ～車の通り道をみんなで雪かき～	中国	家庭	山陰地方の大雪 (平成22年12月～ 23年1月)	92
85		停電と断水も工夫で乗り切る ～石油ストーブ、カセットコンロ、湯たんぼ、山の水が大活躍～		地域・ご近所		93
86		過去の大雪ではなかった倒木被害 ～里山の整備が急務～				94
87		車が通れない真っ白な坂道 ～消防団が医療用酸素ボンベを徒歩で届けた～				95
88		声かけや水配りで安否を確認 ～非常時に心強い、ご近所さんの存在～				96
89		電話が通じず、頼りの消火栓も雪の中 ～火事の対応に手間取る～		97		
90		命を救ったご近所づきあい ～改めて実感するお付きあいの大切さ～		企業・職場		98
91		両車線を塞いでしまった雪のこわさ ～数十台の車をレッカー移動～				99
92		帰省、買い物、初詣、物流トラック ～大晦日の大雪ゆえ、被害も拡大～				100
93		仕事柄、天気や波の情報には過敏なのに ～「着雪」情報、聞きもらす～		行政		101
94		次々と道路に止まる車の救助に追われ、 停電の現場までたどり着けず				102
95		装備や訓練に活かされた過去の教訓 ～全員一丸となって早期送電を実施～				103
96		脱輪した乗用車は、普通タイヤを履いた県外ナンバー ～ナビ頼りの脇道も危険～				104
97		停電のお知らせや復旧の見込みを広報車で伝えるが ～有線放送や防災無線、停電エリアでは機能せず～				105
98		電気を届けられないなら、それに代わる物資を ～支援班がストーブや灯油を届ける～				106
99		海に油が漏れだす恐れが ～安来港で転覆船・沈没船の引き上げを実施～				107
100		災害時要援護者の安否確認で、 心配停止状態の高齢者を発見		108		
101		分庁方式と班編成で、職員を効率的に配置 ～持久戦に備え、入れ替え制で作業を進行～		109		
102		放置された車が引き起こした大渋滞 ～持ち主はパニック～		110		
103	万々に備え、救急ルートの確保と応援協定の締結が急務	111				

平成23年度
「一日前プロジェクト」
エピソード集

仙台市青葉区 30代 女性 会社員



おばあちゃんが残してくれた“備え”を、近所にもおすそ分け

信号も止まり、街中がまさにパニックに近い感じになっているなか、やっとの思いで自宅に帰ってきたものの、家の中はキッチンもリビングも物が散乱状態。

母とふたり、不安になりながら最低限の片づけをしている時に、亡くなったおばあちゃんが残してくれた“防災袋”が出てきたんです。中には簡易カイロもたくさん入っていたので、早速ご近所に配りました。

あの日は夕方から雪が降ったので、わずかな暖であっても、とても喜ばれました。もちろん私も母も“おばあちゃんありがとう”と何度も何度も感謝しました。

震災後は、親戚や親しい知人などの連絡先となる電話番号などを、小さな紙にメモしてサイフの中に入れ、常に持ち歩くようになりました。

当然ですが、携帯電話に連絡先が入っていても電池が切れていると何の情報も得られないわけですから。

常日頃から“備えておくこと”の大事さをわかっていたつもりでしたが、具体的な行動となるとなかなかできないもの。

おばあちゃんの気遣いに助けてもらってからは、悔いを残さないためにも“思ったらすぐやる”ことを実行しています。



仙台市宮城野区 40代 女性 主婦



緊急時の家族との決め事が大事!

自宅にいたときに地震が発生しました。

初めはいつものように、すぐにおさまるのだらうと思っていましたが、今までに体感したことのない揺れに家の中にいるべきか、外に出るべきかただただ自分の身を守ることで精一杯でした。台所の食器棚からは、ほとんどの食器が崩れ落ち、揺れの大きさに驚きました。

家族の安否が気になりましたが、ライフラインは途絶え携帯電話のメールでしか安否が確認できませんでしたが、小学生の子供は、メールにて学校から連絡があったので迎えに行き、無事に帰宅できたものの、祖母などメールの利用ができない親族と連絡が取れず不安でした。

いつまた、あのような災害があるかわかりません……。

家族で安否の取り方を再度話し合い、避難ルートの確認・最低限度の食料の備蓄を心掛けて生活したいと思います。

震災の一日前に戻ったら、明日おこる悲惨な出来事を多くの人に知らせ、少しでも被害が少なく済むようにできたらと思います。



仙台市青葉区 40代 男性 会社役員



災害対策ゼロの自分に気づかされる

事務所でデスクワーク中、「地震だなー」と軽く思った次の瞬間にはこれまで体感したことのない信じられない揺れに…。

ビルが古いこともあり、本棚を始め、ありとあらゆるものが倒れるなか、必死で目の前の倒れそうなものを手で押えてました。とっさの出来事に机の下に身を隠すなど冷静な判断もできませんでした。

独り身で、両親は県外なので、まず心配したのは自宅マンションに居る愛犬のこと。マンションまでは徒歩圏なので、急いでマンションに戻り、啞然…。

8階の部屋は玄関にひび割れ、部屋の中は食器棚からテレビ、本棚まで、事務所同様にメチャメチャな状態。幸いにも愛犬は無事で、部屋のものには一切触れず、愛犬を連れてすぐに事務所に戻りました。

その後は事務所で3日間過ごすことに…。

もし一日前に戻れたなら…。

間違いなく、家電、家具などの壁止め、ストッパーなどの転倒落下防止対策を施し、そして、保存食の在庫状況をチェックしていたでしょう。

災害時用ではなく、たまたま直前に買い込んでいたからこそ保存食に余裕があり、それが結果的に功を奏しただけ…。

災害時を想定し、備えるということは何もしていなかったことに初めて気付かされた今回の震災でした。



自宅も職場も普段の備えが必要だと実感

平日の日中に発生したため、職場や家にいる家族との連絡がなかなかつかず不安な気持ちになったのが一番最初に思ったことでした。

電車などの交通機関がすべて機能しない状態で、当日は家に帰ることができず余震の続くなか職場で一晩を過ごしました。

電気・ガス・水道すべてストップした状態で、電話も混線状態のなか情報を得るためにラジオをつけましたが、普段使用しない単2電池の予備がなくていつ切れるか不安でした。

今後のことを考えて、緊急時に使用する電気製品は比較的買い置きが多い単3電池を使用できるものを選ぶか、普段使わないタイプの電池でも買い置きをしておくべきだと思いました。

普段から飲み水はまとめて購入していたものの、今回のように長期的に水道が使用できなくなると非常に困るので、下水に利用できる水をためておくことも必要だと痛感しました。お風呂の水もすぐに捨てないで残しておいたり、余震で停電があったときも、まずは水が出るうちにためることを優先するようになりました。

震災後、ガソリンの入手に困ったこともあり、最近はガソリンが残り半分になるとすぐに給油するようにしています。

今回の震災を経験して一番思うことは、備えておいて困ることはないということです。普段、疎かにしがちなことですが、いざというときに本当に困るのは自分です。自宅だけではなく、職場にもある程度の備えが必要だとも感じました。



仙台市宮城野区 30代 男性 会社員



備えのない一人暮らしを反省

仕事中に地震が発生。事務所内はありとあらゆるものが倒れてきましたが、けが人もなく、全員無事でした。

その後、外に出ていた社員の安全と田舎の両親に無事なことを報告、幸いにもタイミングが良かったのか、メールで連絡をとることができて一安心。

その後は一人暮らしの寮に戻りましたが、メチャメチャな状態・・・。

一人暮らしの寮住まいのため、普段は自炊を全くせず、毎日の食事は外食とコンビニで冷蔵庫の中はカラ状態が当たり前でした。

田舎の両親に物資の発送をお願いしようとしたのですが、震災発生直後は、宅配便も動かなかったため支援物資も届かず、スーパーもコンビニもダメ・・・。大変な思いをしました。

今回の震災で食料の大切さを感じました。

もし一日前に戻れるなら、缶詰等の食料を買っていたと思います。



直後の判断での買い物が功を奏す

当日は、女性3人で仙台市内の会社(ビルの4階)にいました。

大きな揺れを感じたので、2人を誘導して、携帯電話等を手にし、非常階段で外に逃げました。大きく揺れ動く地面やビルに、OLやサラリーマン達は悲鳴をあげて「嘘だろ?」「やめてー」などと不安を口にしていました。

電話も繋がらない状況で小学校にいる娘と両親の無事を願いながら、私達はすぐには帰らず、停電したコンビニで缶詰やカップラーメンなど保存食をカゴ一杯に買い、3人で分けました。それから3人は解散し、同僚2人は徒歩で自宅へ、そして私は車で名取の自宅にむかいました。

余震がある中、通常30分で移動できる通勤路が大渋滞で3時間かかりました。ようやくたどり着くと母も、父も、娘も無事でした。その一時間後、主人も無事に帰ってきました。同僚2人も無事に帰宅できたことがわかり、ようやく一安心。

今後心がけたい事は、家族の集合場所、食料と飲み物の確保、防寒着の準備、ガソリンを満タンにしておく。電話が繋がらない時の電話以外の家族との連絡方法が何かあったらいいなと心から思いました。

とっさにコンビニで買った大量の食品はライフラインがままならない、その後数日間の、家族の食事の源になりました。同僚2人も直後の買い物が結果、家族を助けることにつながったとのことでした。



仙台市泉区 10代 女性 学生



電気がない生活に悪戦苦闘

懐中電灯から携帯電話に充電を

高校を卒業して大学入学前の春休み期間中に震災が起きました。

その日は母と家において、揺れがおさまるまで家の中でうずくまっていた。茶の間のテレビがテレビ台から落ちたり、戸棚の中のものが落ちてきたりしました。

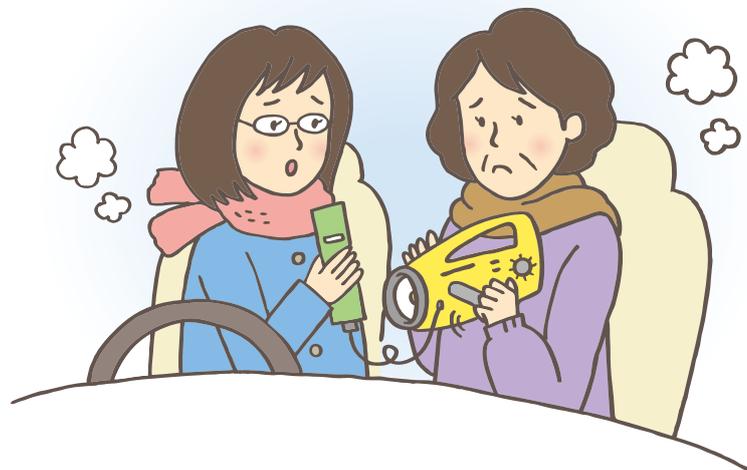
石油ストーブがありましたが、余震が怖かったので母と2人で自宅前に停めてある車の中で暖房をつけて過ごしました。

母の携帯電話がメールは受信しても返信ができなくなってしまったので家族へのメールを自分の携帯電話からしていました。携帯電話の充電がどんどん減っていくので、中学時代に授業で作った手回し充電の懐中電灯に携帯電話の充電ケーブルが付いていたので、それで充電していました。

震災の影響で大学の入学式が中止になりました。しばらくの間、家の電話やネット回線も止まっていたため、大学の入学式が中止になったという情報を得るのに苦労しました。

普段から電気に頼った生活をしていたことに改めて気づかされました。

もし地震の前に戻れるのなら、電気がなくとも家族や大切な友人たちと連絡をとりあえる手段をきっちりと話しておくべきだと思いました。



仙台市太白区 30代 女性 会社員



被災地では携帯電話は繋がらず

他の連絡手段を決めておこう

震災当日はちょうど外に出ていて仕事をしていました。

地震が起こり、立ってられないほどの揺れに地面に倒れてしまいました。その後、家族と連絡を取る事すらできず、どこで何をしているのかと心配しましたが、携帯電話を命綱として使用している現代人は、何かが起こった時に脆いものだと知りました。

私の会社のある場所では、使用している携帯電話は繋がったのですが家族のいる場所では全く繋がらず、連絡がつかない状況でした。

緊急時の連絡先を家族で話し合っておけば、もっと早くに安心できたかもしれません。真っ暗闇の中を車で走りながら、そんな事を思ったのを覚えています。

いざというときの、携帯電話以外での安否確認は家族内で絶対に決めておくべきだと痛感しました。



仙台市宮城野区 30代 男性 会社員



病院の毛布一枚のありがたさを実感

身重の妻と車中で過ごす

地震が起きたのは、出産を控えた妻を産婦人科医院に迎えに行ったちょうどその時でした。

病院内にはたくさんの妊婦さんがいらっしゃったのですが、看護師さんたちの冷静で的確な指示もあり、母体に悪影響を及ぼさないように細心の気配りをしていただきながら、病院の毛布を持参して外に避難したのです。

その後、雪となったので、毛布一枚の暖かさやありがたさを文字通り肌身で実感しました。

その後、車で通常30分の道を2時間かけて自宅マンションに戻りましたが、エレベーターが止まっていたので、階段で5階にある部屋まで上がりました。案の定、家財が玄関にまで散乱していて、足を踏み入れることができませんでした。

結果的にその夜は、車中で過ごすことになったのですがこれが身重の妻にとっては辛かったようでした。

今回の経験を機に、さらに“災害時には何が必要なのか”を見極めつつ、必要な備えは十分に、不必要なものは少なくという暮らし方を、あらためて強く意識するようになりました。





寄り添う人がいることの素晴らしさ

母親との買い物の帰宅直後にあの地震が起きました。

グラツときて母の叫び声でかけつけた私に、怯えた目で恐怖を訴える母をどう助け出そうかと、その思いでいっぱいでした。窓の外に見えるマイカーのあり得ないほどの揺れ、聴いた事もない地鳴り、初めて死を意識しました。

雪が降る中、避難所に移動しましたが、地震の影響で体育館が使用できず、たくさんの方々と近くの小学校へ移動し3日間を過ごす事になりました。

寒さ、空腹、不安に耐え、ようやく電気が復旧。しかしテレビから流れる映像には目を背けてしまいました。

この震災では気づかされたことがたくさんあります。

災害に備え常備していた物品も時節柄実際には使えない物が多かったこと、水や食料、電気関係、防寒関連の物品は常に定期的に確認することが必要であること。そして、自分の苦しい状況を知った仲間が水や物資を集めて届けてくれたことで、助けられたことは一生忘れないでしょう。

一緒に誰かと居る事、人間は1人では難しい事、寄り添う事が大事であり、家族・仲間の大切さに改めて気づくことができました。

一日前に戻れたらというよりも、普段から家族・友人をもっと大切に思い、毎日を生きていきたいと思っています。



仙台市泉区 20代 男性 学生



係員の的確な避難誘導に感謝

海にほど近い、大型商業施設で友人と買い物中に地震が発生。

確かにこれまでに感じたことのない強い揺れではありましたが、ここまで津波が来るとは思ってもいませんでした。

当然、テレビもラジオも手元にありませんでしたし、揺れがおさまったこともあり、割と落ち着きを取り戻した時に、館内放送と合わせ、従業員と思われる方々が、ただちに海から離れた方向に避難するようにとの緊急の案内をしていました。

そんなに急がなくても大丈夫だろうと思いながら、周りのお客様達と同様にその指示に従い、徒歩で近隣の避難場所へ移動。

このときもまだ、正直に言うと、大袈裟だなーと友人と話していました。

そして、その数十分後、その施設まで津波が到達したことを知りました……。

幸いにもその施設からは全員が避難しており、皆無事であったことも後日知ることができました。

あのとき、従業員の方の的確な避難誘導が無かったら、そのまま施設に残っていたかもしれません。今でもそう思うと怖くなります。

今はただ、あのときの施設の従業員の方にただ感謝あるのみです。





近所のスーパーは長蛇の列!

3時間待ちで食料を手に入れる

地震が起きたときはパート先でした。その日は交通機関が動かず、家に戻れたのは次の日でした。

幸い大きな被害はなかったのですが、食料品が底をついていました。急いで近所のスーパーに向かいましたが、長蛇の列! 店舗に入るまで3時間程かかりました。その上、飲料を求めてまた順番待ち。

地震が起きる事は何年も前から何度も報道されていましたが、私の中では「まさか…」という思いがあったのだと思います。普段から防災意識を深め、備えをしておくべきだったと反省しています。また、近所の方々にも色々助けてもらった部分も改めて実感しました。

もし、震災の一日前に戻ったら、家族との安否の確認、伝えられる範囲の方々に連絡し混乱を少しでも緩和できればと思います。



仙台市泉区 30代 女性 主婦

自分より他人を優先する素晴らしい友人

自宅で夕食の買い物に出かけようかなと考えていたところ、地震が発生。

幸いにも家族はみんな無事に帰宅できたので、まずは安心できました。電気・水道は数日で復旧し、お米を始め、数日間は何とかなる程度の食料はあったのでカセットコンロを使用し、料理をして何とか生活できていました。

そんなとき、飲食店オーナーの友人から連絡が入り、可能な限りでいいのでお米をもらえないかと。

当然、まだ営業できるわけでは無いと思っていたので、自宅分かと思い、「飲食店オーナーなのに、お米のストック無かったの?」と聞いたら、近所で困ってる方のために炊き出しで、おにぎりを配布するので、できる限りお米を集めたいと。

こんな状況で自分たちのことより、周りの方のことを考える素晴らしさに感動。

今回の経験から、どんなときでも助け合いの精神、心に余裕を持つことができる人間になりたいと改めて感じることができました。

震災が起きてからではなく、普段からの心掛けが全てですね。





仲間の大切さ

スナック菓子やパンを届けてくれる

お客様の事務所で打ち合わせ中、強烈な揺れ……。

当然、打ち合わせを中止して帰社し、上司の指示に従い、社員の安全確認を取ったあとは解散。

一人暮らしなので、実家の両親に何度もメール・電話をするも繋がらず、お腹がすいてきたので冷蔵庫を開けてみると何も無いことに気づきました。

自転車で近隣をまわってみたものの、食料を買えるようなところはどこも空いておらず、途方にくれて家でじっとしていると夜に友人からメールで「大丈夫か？ 食べるものあるか？」と。困っていることを伝えると、友人2人が1時間後にスナック菓子やパンなどを車に積んで自宅まで来てくれました。この後も、仲間のところに届けに行くと、涙が出そうでした。この時、仲間の大切さに改めて気づかされました。

今回は全く備えをしていなかった自分が仲間に助けられたことに感謝。

もし、震災前に戻れたなら、自分がしっかりとできる限りの備えをし、逆に仲間を助けて回れる立場になれるようにしたいと思います。



仙台市青葉区 30代 男性 会社員



ボランティア精神の素晴らしさ

トラックいっぱいの物資を被災地に届ける友人

地震から数日たって友人から、缶詰類、お水、保存食等、何でも、少しでもいいから譲ってくれないかとの連絡がありました。

その夜、その友人が訪ねてきたので「大丈夫?」と聞いたら、「俺は大丈夫だけど、奥さんの実家が大変な状況らしい・・・」と。聞くと、その町は津波で甚大な被害を受けた町。ここ数日で可能な限り物資を集めて、現地まで物資を届けに出向きたいので、仲間で手分けをして物資を集めに回っているとのこと。

私は同行できませんでしたが、数日後、その友人がリーダーとなり、仲間数名と一緒に、水、缶詰類、ティッシュ、トイレトペーパーなどの食料・物資をトラックいっぱいに積み込んで、3時間かけて現地まで届けに行ったそうです。

無事届けられたことの報告、食料を譲ってくれてありがとうとの感謝もいただきました。

当時はガソリンの手配はもちろん、余震もまだあり、道路状況もひどいとき。友人とその仲間たちは、かなりの覚悟を持って向かったそうです。

その友人たちは今でも継続的にボランティア活動をしています。

こういうボランティア精神は短期間で持てるものではなく、常日頃から強い意志がある人間だからできることなんだろうと強く感じました。



仙台市青葉区 20代 女性 会社員

やっと繋がりに実家の家族に無事を伝える

地震が起きた日は、会社にいました。

棚が崩れ、立っているのがやっとの状況のなか、私は言葉が何も出ませんでした。机の下へもぐり、揺れがおさまるのを待ち、外へ出ても余震が続いていました。4トントラックと電信柱が大きく左右に動いているのを見て、この地震の大きさを改めて感じました。

その後アパートに戻り、近隣の方々と避難所で何日か過ごしました。その期間中もずっと青森の実家の家族に無事だよと伝えたくてリダイヤルを押し続けていました。やっと連絡がとれた時には、いろいろな感情が交じり合い泣いてしまいそうでした。

私は直接的な被害が少なく、大変な思いをした方より災害の影響は少ないです。

あれから9ヵ月たちますが、先の見えない仮設住宅で生活する知人、未だ会社、仕事が不安定な方々も沢山いて、まだまだ問題は山積みです。

私にできることは少ないかもしれませんが、被害の大きかった沿岸部に向けたボランティア活動や、この先の生活に不安を抱える知人に向けたできる限りの支援などに積極的に関わっていきたいと思います。



仙台市若林区 40代 女性 主婦

友人との情報交換・役割分担で協力体制を

一家4人、全員無事でしたが、何よりも困ったのは土日で1週間分まとめ買いするのが通例だったので食料に余裕が無かったことです。何とか数日耐えましたが、そのあともスーパーに数時間も並ぶ、ガソリンスタンドでの給油に4時間待ち…。

今まで想像したこともなかった日々が続きました。そんな中でも時間が経つと、色々な情報が入ってくるようになりました。

明日はあそこのスーパーが開店する、野菜がたくさん入荷する、あのコンビニにお水が大量入荷するなど。Twitter*などでも色々な情報が上がってきました。そこで友人たちと積極的に情報交換をし、さらに役割分担で協力体制を組みました。

一人はスーパーに並び野菜をメインに買う、一人はドラッグストアで日用雑貨を買う、一人は別のスーパーでお米を買う…など。

そして、それぞれの買い物終了後に合流し、均等に配分しました。体一つではできることに限界があるので非常に効果的でした。

震災が起きてからでは遅い…。やはり、普段からのお付き合いや情報交換など、主婦には大事なことなんだと改めて痛感。

何か起きた時に助け合える友人が周りにたくさんいることが大事なのではないでしょうか。

*Twitterとは、web上に公開されている、140文字以内の短い投稿(ツイート)を入力して、みんなで情報を共有する無料のサービス。



毛布持参でホテルへ避難

お米と炊飯器も持ち込みご飯を炊く

仙台市中心部の高層ビルの中で、就職試験を受けている最中に地震が起きたのです。

階段を下りて外に避難しましたが、ひとりであるのが不安で心細かったため、同じ試験を受けた初対面の女の子と手を取りながら、徒歩で私が住んでいる賃貸マンションまで一緒に帰りました。

携帯電話もメールも不通の中、唯一見ることができたTwitter[※]で阪神淡路大震災の時の教訓に関する書き込みをチェックしながら、街の状況を把握しようと歩いていたら、あるホテルが避難場所として開放されていることを知り、早速ふたりで毛布を持参して向かいました。

非常時電源が確保されたホテルでは暖房や電気もついて暖かだったので、心からありがたいと感謝。

翌日には、恥ずかしい気持ちを強く振り切り、意を決して自宅からお米と炊飯器を持ってきて“炊飯”しました。そのご飯を持って自転車で実家に届けた時、家族が喜んでくれた笑顔がいまでも忘れられません。

震災を経験して感じたのは、情報がとても大切だということ。

あとは生きるうえでの勇気ですね。

恥ずかしいと思うことが、とても小さなことだったのだと身をもって経験しました。

※Twitterとは、web上に公開されている、140文字以内の短い投稿(ツイート)を入力して、みんなで情報を共有する無料のサービス。



仙台市若林区 50代 男性 会社員



仙台港での信じられない光景

自分の車も流されていく

職場のある仙台港で震災に遭いました。

仕事の関係上、港のすぐそばに立地した事務所におり大津波警報が発令されたため、隣接した会社の関連施設の確認に回り、社員はそれぞれ自家用車をできるだけ離れた場所に移動させました。

しかし、この時点で津波がそこまで大きいとは思っていませんでした。指定された上階の避難場所に入ってドアを閉めたと同時に津波が来て、窓から自分の車が流されていく様子をただ見ていることしかできませんでした。

移動手段がないため一晩をそこで過ごし、翌朝泥だらけの中を歩いて帰宅しました。

会社の場所が場所なだけに、許可が出るまでは自宅待機でした。

東京の本社や全国の支店からの救援物資が届き、自宅待機が解除され、会社で借りたレンタカーを社員で相乗りして出社する日が続きました。

2週間ほどして、流された車を発見し積んでいたものを取り出しましたが車自体は廃車にせざるを得ない状態でした。

今は少しでも自分の体験を多くの方に伝えることで、この後震災が起きた時に被害が少なくなるように願うばかりです。





忘れられない 3・11

スタジアムのスプリンクラーが破裂して水びたし

3.11は、会社の仕事でスタジアムにいました。

携帯電話の緊急地震速報が鳴り、「あっ地震だ！」いつものように大した事は無いだろうと思った瞬間、ドーンと激しい揺れがやってきました。

スプリンクラーが破裂して上からは滝のような水が降ってきたし、下からは激しい揺れ、その場から逃げようにも揺れて逃げられない。一瞬のスキをついて千鳥足でスタジアムから脱出！幸いにも社員は全員無事でしたが、皆、顔面蒼白でした。

今まで経験したことのない揺れだったことと、周囲のみんなの表情からも不安でいっぱいになり、正直、落ち着きを取り戻すのにかなり時間を要しました。

その後会社に戻り、帰宅指示が出たので自宅に戻り、荷物を取って車の中にいました。車で携帯電話を充電しながら実家や友人などにメールで連絡を取り合いました。翌日は実家がある山元町に戻り、地震、津波の恐ろしさを知りました。

もし、地震の前に戻れたら……。

やはり、普段から家族、大事な友人とは携帯電話以外に連絡をとれる約束事を決めておくことが重要だと心の底から感じた数日間でした。



仙台市若林区 20代 男性 会社員



無我夢中で運んだ仮設トイレ

もし妻や子どもがいたら？

勤務している会社が、仮設トイレなどをリースする業務を行っていたこともあり、震災直後から、避難施設などにトイレを配送する仕事に追われていました。

トイレを保管しているセンターは山間部にあり、それをトラックに積んで指定の避難施設まで運ぶのですが、限られた燃料の中でいかに効率良く運ぶか、速やかに届けることができるか、それだけを考えていました。

途中の道路ではアスファルトが割れていたり、マンホール部分が盛り上がっていたりと危険な箇所も多々あり、本当に無我夢中でハンドルを握っていたことを思い出します。

センターでは男性社員3名がカンヅメ状態となり、自分の家族の安否確認やケアよりも避難先施設への支援を優先させていきました。

私自身、まだ独身なので、両親の無事を確認した段階で脇目も振らず仕事に専念していましたが“もし妻や子どもがいたら？”と、いまになって考えることがあります。

それでも“トイレがきて本当に助かりました”という声を聞いたとき、未曾有の震災という非常時に、みなさんの役に立つことができよかったですと思っています。





冷静で礼儀正しい帰宅困難者

トラブルなく、ゴミも残さず

荒川消防署へ消防訓練の視察に行っている最中に地震は起こりました。私は災害の対応のため、渋谷区にある消防学校に戻らなくてはなりません。すでにJRや地下鉄などの公共交通機関がストップしていたので、タクシーを拾って消防学校へと戻りました。道中、甲州街道には徒歩で帰宅する人々が集まり始めていました。

消防学校の職員約100人、生徒約50人が震災非常配備態勢に入り活動していると、本部から帰宅困難者受け入れの指示が入りました。しかし、決まった対策はありません。そこで急遽、計画を作成し、人員の配置、受け入れ場所、必要な物資などを検討し、夜10時30分には受け入れを開始。トータルで208名の方々を受け入れましたが、翌朝7時45分に最後の方が帰られるまで、誰一人として不平不満を言う人はなく、トラブルひとつ起こりませんでした。皆さんが非常時にも関わらず、マナー良くルールを守って行動した結果でしょう。ゴミを残さず、お礼を言って帰られる姿に、私たちは深い感銘を受けました。



東京都 40代 男性 消防学校職員



同じ災害は2つとない

始まったばかりの帰宅困難者対策

今回の震災が起こるまで、帰宅困難者の対策はなされていませんでした。現場での臨機応変な対応が必要となります。食料、飲料水、防寒用の毛布、怪我人の治療……そして、どうやって皆さんに来ていただくのか。

まずは近隣の状況を手分けして調べると、代々木上原駅の周辺に大勢の人が集まっていることが分かりました。職員が一人一人に声を掛け、看板を設置、ライトアップして避難所のアピールを続けていると、次第に行き場を失った人たちが集まってきたのです。

まずは講堂と教室を開放し、男性と女性に部屋を分けました。仲間同士で一緒に居たいという人もいましたが、セキュリティの問題だと説明すると素直に従ってくれました。また、全員が途中で食料などを買ってきていたので、職員用に備蓄していた食料と飲料水を使う必要はありませんでした。怪我人もハイヒールで歩き続けて靴ずれした女性に絆創膏をお渡ししたくらいで済みました。

結果、今回は無事に帰宅困難の方々を受け入れることができました。しかし、同じ災害は2つとありません。帰宅困難者の対策は始まったばかりなのです。





情報があると安心

スクリーンでニュース映像を流す

今回、帰宅困難者の方々がもっとも必要としていたもの、それは情報です。地震直後から携帯電話の回線がバンクしてしまったため、家族の安否確認が取れない人も多かったはず。そこで、避難されている方々に向けて、大きなスクリーンでテレビのニュース映像を流すことにしました。画面には津波などの甚大な被害が流れていましたが、同時に都内での被害が少なかったことなど、安心できる情報も得られたので、皆さんパニックにならず冷静に過ごされていました。

今回の震災では、Twitter^{※1}やSkype^{※2}で安否の連絡を取った方々の話をよく聞きましたが、インターネットの重要性が確認されたように思います。インターネットでは知りたい情報をピンポイントで調べられるし、情報が早いこともあり、それも提供するようにしました。

深夜0時30分頃に電車の運転が再開すると、避難されている方々のなかには帰路につく人も多かったのですが、状況が分かったために安心して朝まで泊まっていく人もかなりの人数がいたのです。情報があるとないとでは、安心感が違うことを痛感しました。

※1 Twitterとは、web上に公開されている、140文字以内の短い投稿(ツイート)を入力して、みんなで情報を共有する無料のサービス。

※2 Skypeとは、インターネットを利用した世界中どこへでもかけられる無料の電話サービスのこと。



東京都豊島区 40代 男性 自営業



商店街のメンバーで帰宅困難者に炊き出し

心も温まったフカヒレスープ

震災の次の日は土曜日で、商店街ではイベントを予定していました。フカヒレスープを販売するというものです。でも、夜7時前には、この状態でイベントをやっている場合じゃないと判断して、炊き出しとして帰宅困難者の方々に提供しようということになりました。

ところが、メンバーを集めようにも携帯電話が繋がらない。近所の家に行ってチャイムを鳴らして回って集まった10人ぐらいで炊き出しの準備を始めました。いつもなら、イベントではガスコンロを持って行って現場で作るのですが、それでは時間がかかりすぎる。そこで、和菓子屋さんの厨房を借りて、寸胴鍋2杯分のフカヒレスープを作ったのです。

販売するときには井で出す予定でしたが、より多くの人に飲んでもらいたいので、紙コップで提供することにしました。商店街の入り口にある広場で、夜の9時から配り始めて11時まで、用意した400杯は2時間でなくなってしまいました。あの日は寒かったから、皆さんとても喜んでいました。

たまたま次の日がイベントだったおかげで、食材があってよかったです。遠くまで歩いて帰る人たちの助けに、少しでもなれてよかったですと思います。





イベントの最中に地震が発生

自宅への道順が分からない方をサポート

震災の当日は、商店街入り口の広場で開催されるイベントの初日でした。地震が起きた時間は、人出のピークは過ぎていましたが、普段の平日より人通りが多くて、軽く1000人以上はいたと思います。

大きな揺れがなかなかおさまらず、お客さんに店内に止まってもらうか、それとも屋外に避難してもらうか迷いましたが、店内は危ないと判断して、お寺の境内にある広場に避難してもらうようにしました。

皆さん無事で安心しましたが、本当に大変だったのはその後です。電車が止まってしまい、駅にどんどん人が集まっていくのが見えました。それから地下鉄が動き始める夜11時過ぎまで、歩いて自宅まで帰る人々が国道に溢れ返ったのです。

商店街のメンバーで帰宅困難者のサポートをしましたが、意外だったのは、自宅まで帰る道順を知らない人が多かったことです。普段、電車で移動するから分からないのでしょうか。大勢の人から道を尋ねられました。



東京都豊島区 40代 男性 自営業



電話がつながらずに走って確認

避難所の場所が分からない

この周辺では、小学校が災害時の緊急避難場所になっています。帰宅困難となった人たちのなかには遠方に帰らなければならない人も多かったようで、高崎から来ている人もいました。そういった人たちから、どこか泊まる場所はないかと訊かれましたが、近所でどこの施設が開放されているかの情報がまったく入ってきません。

電話もつながらない状況だったので、調べるためには自分の足を使うしかありません。もしかしたらと思って、近くの小学校に走っていくと、帰宅困難者を受け入れていたのです。それが夜の8時から9時の間ぐらいのことです。それからは、受け入れ先を探している人に、その小学校を案内するようにしました。後で分かったのですが、お寺さんにも避難された方々がいたようです。

宿泊施設の他に訊かれたのは、自宅に帰る方角、トイレや公衆電話の場所、電車の運行状況が多かったように思います。トイレはお寺さんやコンビニ、国道沿いの公衆トイレを案内して、運行状況はテレビやインターネットで調べた情報をできる限り提供しました。それと結構多かったのが、靴ずれしてしまった女の人です。そういった人には絆創膏をお配りして対応しました。





震災の4ヵ月前に危機管理マニュアルが完成

非常時の対策が功を奏す

地震のあった日は午後3時から理事会が開催される予定でした。そろそろ会議が始まるのでその準備をしていたところ、地震が発生したのです。長く、そして徐々に大きくなる揺れに、尋常ではない事態だと察しました。

幸いなことに会議室には、すでに理事長や総長など主要なメンバーが揃っていました。まずは情報を得ようとテレビをつけると、思っていた以上の事態の深刻さが明らかになりました。そこですぐに理事会の中止を決定し、その5分後には対策本部を設置したのです。

本校では、2年ほど前から災害時の危機管理に関するマニュアルを作成する作業に取り掛かっていて、それが完成したのが地震発生の4ヵ月前だったのです。今回はたまたまタイミングがよかったと言えるのかもしれませんが、しかし、いつ起こるか分からない災害でも、心がけがあるかないかで、その対応に大きな差が生じることを実体験したのです。



東京都豊島区 30代 男性 大学職員



乳幼児に必要なもの

ミルクを作るのに必要なお湯、そしてベッド

最初は老若男女分け隔てなく、同じ教室に誘導していたのですが、なかには赤ちゃんや小さなお子さんを抱えたお母さんの姿も見かけました。そこで、乳幼児と母親のために、別の教室を開放することにしたのです。母子合わせて40~50人ほどの人たちを、5部屋に分けて休んでもらうことにしました。

大人用に水と食料は配付していたのですが、乳幼児に必要なものは予測していなかったものもありました。まずはお湯。ミルクを作るために必要でした。また、図書館にあった簡易用のベッドを教室に持参しましたが、高さがあって乳幼児は転落する危険性があるとのことから、体育で使用するマットを改めて運び入れることにしました。これでやっとお子さんを寝付かせることができるだろうと、お母さん達も少し安心した様子でした。

この日はかなり寒かったのですが、小中学校とは違い、大学には毛布の準備はあまりありません。今回は暖房をつけて対応しましたが、もし、電気が通っていなかったら、果たして受け入れることが可能だったかと、考えてしまいます。





校内放送を使って避難の指示

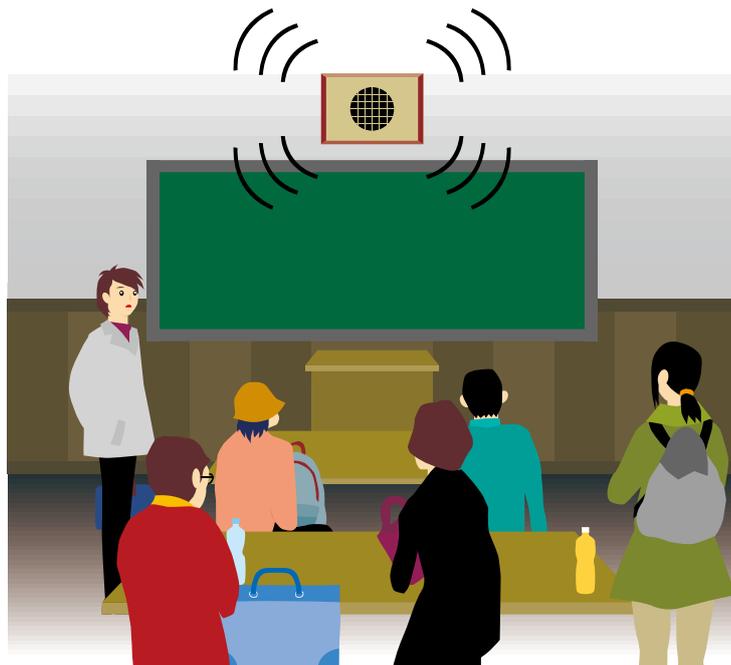
落ち着いた行動で怪我人はゼロ

震災当日、大学は入試も終わって春休み中でした。それでもクラブ活動などで学校に来ている学生が、校内に1200人ほど残っていました。

余震の心配もあります。学生の安全を考えて、どこに避難させるかを本部で話し合いました。屋外にはそれほど広い場所はないですし、なにしろ寒い。これまで校舎の耐震工事を計画的に行ってきたので、建物内が安全だという結論になりました。

職員が手分けして学生を教室に集めました。そして、慌てて避難して怪我人など出ないように、校内放送を使い「落ちついて行動してください」「建物の中に居てください」とアナウンスを流したのです。学生たちも素直に指示に従ってくれたこともあって、怪我人も出ず大きな混乱もなく、スムーズに避難することができました。

後に一般の帰宅困難者の存在が分かって、最終的には学生も合わせて4500人ほどの人たちを受け入れることになりました。怪我や気分が悪くなった人のため、医務室で担当を待機させましたが、特になにもなくホッとしました。



東京都豊島区 50代 男性 大学職員



備蓄した水と食料、そしておにぎりを配布

全員が協力し合ってトラブルなし

これまでも大学では計画的に、飲料水と乾パン・ドライフードなどの食料がある程度備蓄してきました。ただ、帰宅困難者のことまでは想定していません。食料が足りるか心配でしたが、この日はたまたま食堂業者の人が学校に来ていたので助かりました。お米があるからおにぎりは作れる、と協力してくれたのです。

夕方5時頃から帰宅困難者の受け入れを開始すると、続々と校内に人が集まってきました。これからどれだけ人が増えるか分かりません。ひとまず学生を含めた全員に、水を1本とドライフードかおにぎりを配布することにしました。

今回、4500人もの人を受け入れましたが、驚いたことに、こんな非常時にも関わらず皆さん、順序良く列に並んでくれて、割り込む人や数をごまかす人はいませんでした。ここに来る途中で食事や飲み物を調達してきた人もたくさんいましたが、その人たちは「私たちは持っていますから」と水や食料を他の人のために譲ってくれたのです。

皆様のご協力もあって、用意した水と食料は全員に行き渡りました。





清掃業者の協力で清潔なトイレを提供

避難者のマナーもありがたい

今回は業者の方が協力してくれたことによって助かったことがありました。特にお世話になったのは清掃業者の方々です。

大勢の帰宅困難者が校内で一泊するというこれまで想定していなかった事態です。どんなトラブルが起こるか分かりません。そこで、清掃業者の方も一役買ってくれることになりました。

校舎内で避難している4500人ほどの方々がトイレを使うので、異物などが詰まる可能性があります。トイレが詰まったのは1箇所だけで済みましたが、仕事はそれだけではありません。清掃やトイレトーパーの補充など、業者さんは夜通して対応してくれたのです。おかげでトイレ内部や洗面所が汚れているなどの苦情は一切ありませんでした。

地震に襲われ、交通手段も奪われ、学校内の教室で一晩を過ごす人たちに少しでも快適に過ごしてもらいたいという思いが伝わったのか、皆さん非常に綺麗に教室を使ってください、全員が帰られた後もゴミはほとんど落ちていませんでした。



東京都豊島区 50代 男性 大学職員



一番要望が多かったのは情報

スクリーンでニュース映像を流す

今回、避難されている方々に必要だと思って提供したのは、水に食料、それと乳幼児が休むためのマットや毛布などでした。何せ初めての経験なので、他に何が必要か見当のつかない部分もあります。避難者の方に、何か他に必要なものがあるかと訊いてみると、もっとも要望が多かったのは情報でした。

地震の発生が平日の午後3時前ということで、水や食料はある程度確保できた人が多かったようです。後はパニックにならないためにも、可能な限り情報を伝えるようにしました。

最近の大学は設備も充実しています。教室には大きなスクリーンがありましたので、そこではずっとテレビのニュースを流しました。また校内放送でも交通など重要な情報をアナウンスして、安心材料の提供に心がけたのです。皆さんこれで安心されたようで、深夜0時過ぎに電車が動き出した後でも、駅の混雑を避けて校内に朝までとどまる人も大勢いました。

後日、避難された方から「情報があったから助かった」というお礼の手紙をいただき、私たちが救われた気がしました。





錯綜さくそうする情報

ホワイトボードに仕入れた情報を書き込む

震災の4ヵ月前に完成した災害時緊急マニュアルには、対策本部を作ること、その際の本部長は誰にするかなどの規定があったため、比較的スムーズに初期段階での準備ができました。地震が起きたのが、たまたま理事会が開かれる直前だったこともあって、そのまま会議室が対策本部となりました。

錯綜さくそうする情報を整理するため、対策本部ではホワイトボードを活用しました。テレビやラジオ、そして学内で得た情報でも何でもいから、とにかく仕入れた情報を書き込んだのです。そうしていると、被災地の状況はもちろん、池袋駅が大変なことになっていることが分かってきました。電車が動かずに、駅には人が溢れているようです。当校は災害時の広域避難場所に指定されています。帰宅困難者の受け入れを決めたのは、夕方5時前ぐらいでした。

池袋駅では「大学に行ってください」とアナウンスしている様子で、それからほとんど人が集まって来ましたが、何とか対応できました。

ホワイトボードは、職員が情報を共有するために、大いに役に立ったのです。



東京都豊島区 50代 男性 大学職員



携帯電話での緊急連絡システムを構築

公衆電話が使えない学生も

当大学には、2010年4月にスタートした携帯電話を利用した緊急連絡システムがあります。東京で震度5強以上の地震が発生すると、学生・教職員の携帯電話に安否確認のメールが自動送信されるというもので、学生の約8割が登録しています。

今回の震災では、被災地出身の学生のなかで安否の返事が来ない数百人に、手分けをして個別に連絡を取りました。結果、全員無事でした。立ち上げたばかりのシステムでしたが、非常時に備えることの大切さを実感しました。

携帯電話の有用性が確認できたのと同時に、今回の震災では携帯世代の弱点も見えました。携帯電話が通じづらくなっていたことで、校内にある数台の公衆電話の前には行列ができていたのですが、驚いたことに、学生を含めた若い避難者の人たちのなかには、公衆電話の使い方が分からない人がいたのです。都内にかけるのに最初に03が必要かどうか、受話器を取ってからプッシュホンを押すのか？若い世代には携帯電話しか使ったことがない人もいたのです。





帰宅困難者受け入れへの不安

秩序正しく行動する日本人の姿を見た

地震発生後に池袋駅の近くを通ると、泉から水が湧き出すように人が溢れているのを目にしました。やがてその人々の一部は、我々の大学で受け入れることとなります。その際に感じたのは、知らない人たちを受け入れることへの恐怖感でした。実際に帰宅困難者を受け入れてからは対応に必死でしたが、後に私の心配は取り越し苦労だったことが分かりました。

トータルでおにぎり2600個、水3000本、クッキーなど1500袋を配りましたが、奪い合いもトラブルも起こらず、不満を言う人もいませんでした。あれだけの人数を受け入れたのに、盗難も破損も汚損もない。秩序正しく、周りの人々に配慮をする日本人の姿は美しく立派に感じました。

後日、感謝の手紙を何通かいただきました。お礼を言われるためにしたわけではありませんが、正直嬉しかったですね。今回は様々な偶然が重なって上手く対応できましたが、次はどうなるか分かりません。インフラが切断されたら、または一晩ではなく二晩、三晩と続いたら、そう考えての対応も今後、考えなくてはいけないのかもしれませんが。



東京都大田区 20代 男性 空港ビル勤務



空港ターミナル内がもつとも安全な場所

館内放送と職員の声かけで誘導

地震発生時、空港内の店舗にはたくさんのお客様がいらっしゃいました。店内には、商品を陳列している棚、他にも電気スタンドなどがありましたから、安全のため、お客様には店の外に出てロビーに集まっていただくように誘導しました。

倒れてくる危険性のある高いものから離れ、看板などの落下物の心配のない場所に座って揺れが収まるのを待つように、お客様に声をかけました。

揺れている最中は皆様、意外と冷静な様子でしたが、揺れがおさまってから、混乱が始まりました。すでにゲートの中に入ってしまった方はできませんが、ロビーにいたお客様の中に、建物の外へ逃げようとする方がたくさんいたのです。

空港ターミナルは、ロビー内にガラスが落ちない仕組みになっているなど、建築構造上建物の中が最も安全な場所として設計されています。とにかくお客様には、安全な室内に戻っていただかなければなりません。館内放送でターミナル内が安全であることをアピールし、外に出ようとするお客様に職員が声を掛けて誘導すると、皆様、素直に従っていただきました。





マニュアルに基づき地震から1時間以内に対策本部を設置

自主的な判断も重要

空港では災害時のマニュアルが定められていましたが、交通機関のストップは想定されていませんでした。

対策用のマニュアルに従って、緊急対策本部は地震発生から1時間以内に設置されました。その時点で滞留者が多数であることは予測済みです。その対策としてまず考えられたのが食事の確保。そして、一晩中の対応が予想されましたので、その間トイレを清潔に保つ必要もあります。清掃員を通常より厚く配備して対応しました。

空港では災害用の備蓄品として、1万1000人分の非常食や毛布を用意していました。ただ、その配付方法や人員配置などはマニュアルに盛り込まれていなかったのです。備蓄場所から人の手で運び出す必要があります。正確な情報が入ってこないなか、一人ひとりの現場での自主的な判断が求められました。空港スタッフ同士で連絡を取り合い、臨機応変に対応することが必要となったのです。



東京都大田区 40代 男性 空港ビル勤務



行き場を失った旅客機

ジェット燃料がなくなるまでがタイムリミット

空港ターミナル内にいらっしゃるお客様への対応は重要ですが、私たちには更に優先すべき事項がありました。それは、東北方面へとフライトしたものの、行き先を失って上空を旋回している旅客機への着陸先の誘導です。

夜8時の段階で、上空にはまだ10機ほどの飛行機が待機していました。ジェット燃料がなくなったら墜落してしまいます。国土交通省と連絡を取り合い、敷地内の面積も計算して、最大限の飛行機と乗客を受け入れることに集中しました。

なんとか飛行機の着陸問題が解決すると、それからは空港内に滞留されるお客様への一晩中の対応となりました。空港内の休憩室はもちろん、椅子やベンチも人でいっぱいです。お年寄りや、体調が悪い方は、床で寝転んでいる人もたくさんいたのです。もちろん皆様には、毛布や段ボールを支給させていただきました。

なかでも印象に残っているのは、耳の不自由なお客様です。ホテルで休みたいとのことで、知りうる限りすべてのホテルに電話しましたが、どこも空いていません。結局、ターミナルで一夜を明かすことになってしまいました。





携帯電話の無料充電サービスに人ばかり

目に見える情報をいち早く提供する重要性

皆様が、情報を知りたい、外部と連絡が取りたい、と思っておられるようでした。お客様のなかにはパソコンやワンセグ機能付きの携帯電話をお持ちの方もいらっやって、それを皆で食い入るように見られていました。

空港では、地下一階の案内所で携帯電話の充電サービスを行っているのですが、その無料充電器では到底、お客様の数に間に合わず、あっという間に案内所にあったコンセントもすべて充電器で埋まってしまったのです。タコ足の延長コードや充電器を、いろいろな所からかき集めても対応しきれません。すぐに案内所は黒山の人だかりです。ほどなく順番を巡ってお客様同士でトラブルが起こり始めたので、列の整理にあたりました。

そのときは対応に精一杯で気づきませんでした。お客様から「何でそんなに重要なサービスをやっていることを表立って知らせないのか」とのお叱りを受け、ハッとしました。

すぐに無料充電サービスを告知する貼り紙を作って掲示させていただきました。目に見える情報を、いち早く提供することが大事だと知らされました。



東京都大田区 40代 男性 空港ビル勤務



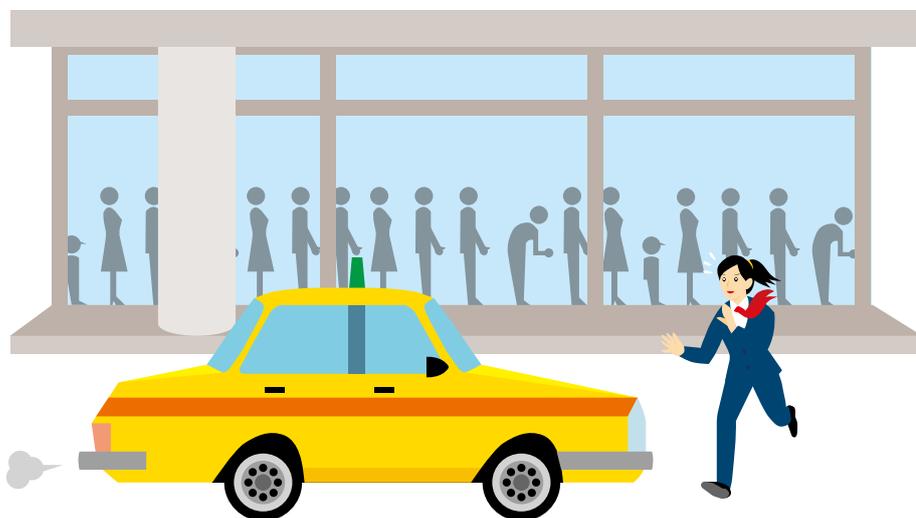
タクシー運転手同士、無線で情報交換

運転手に空港へ戻るようお願いして回る

地震直後に電車やモノレール、リムジンバスなどすべての公共交通機関がストップしてしまいます。緊急対策本部では、早い段階からここが孤立してしまうことは予測していました。翌朝まで唯一動いていたのはタクシーでした。しかし高速道路は利用できません。都内各所には通行できないところがあって、運転手の方々はカーナビではなく、自分の目で安全を確かめて道路を選んでいたようです。どこの通いや橋が通れるか、または通れないかの情報をタクシー同士、無線で連絡しあっていたと聞きました。

横浜でも片道2時間くらい、千葉方面ですと片道6時間はかかるという道路事情のなか、大変だとは思いましたが、私たちはタクシーの運転手の方々に「大勢の人々が空港から出られずにいます。お客様をお送りしたら、ぜひ戻ってきてください」とお願いして回りました。

移動手段がタクシーしかないため、乗車待ちは長蛇の列。乗車するのに4時間以上かかる状況です。お客様から外で待つのが寒くてつらい、という声があがり、ターミナルの中で待っていただくことにしました。私どもスタッフが協力してタクシーを捕まえ、お客様を順番にご案内することにしたのです。





安否確認ができなくて心配

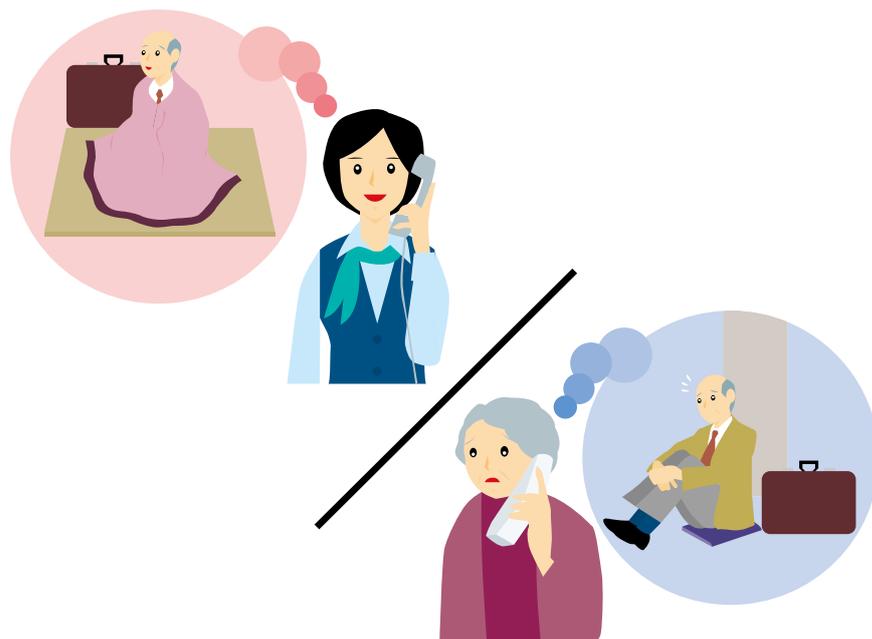
できる限りの情報提供で一安心

外部から空港にかかってくる電話の対応も、私たち受付の業務です。地震の後は、空港内でも携帯電話が通じない状態が続き、公衆電話にも長蛇の列ができていました。

そういったなか、固定電話ならつながるということで、空港から出られなくなったお客様の安否を憂慮する、ご家族やご友人からの電話が一晩中、ひっきりなしにかかってきました。皆様、せめて空港内の状況を知りたいと思って、問い合わせしてきていたのです。とても寒い日でしたので、それを心配する方が多かったように思います。施設内のお客様全員に毛布をお配りしていることを伝えますと、少しはホッとされている様子でした。

なかには体が悪いご主人のことが気がかりで、電話してこられた奥様もいらっしゃいました。地べたに座っていないか、寒い思いをしていないか、と案じていました。「毛布と一緒に段ボールも配っていますから、大丈夫だと思いますよ」とお答えすると、ホッと一安心されたようです。

私には目に見える範囲での情報をお伝えするしかできませんでしたが、それによって少しでもご家族、ご友人の方々の気持ちが落ち着かれたのであれば嬉しいです。



横浜市 30代 男性 会社員



冷静でいられたのは、不安を煽らぬラジオのおかげ

東日本大震災が発生した時、私は横浜にある会社にいました。会社は9階建てのビルの9階。棚の上の段ボールや書類などが落ちてきました。

そして役に立ったのが、ラジオ。普段からラジオをかけながら仕事をしているのですが、ボリュームを大きくして、被害の状況、電車の運行状況などを確認しながら仕事を続けました。もしもテレビの映像を、それも津波の映像を見ていたら、平常心でいられたか…自信がありません。そういう意味でも「ラジオで良かった」と思いました。

自宅は会社から歩いて20分、自転車で10分位という距離。夜10時過ぎ、いつも通り、自転車で帰りました。大きな国道を歩いている人が凄く多かったこと、そして私の横をローラーブレードの人が通り過ぎて行ったのが印象的でした。

私の仕事は広告代理店なので、大地震が起こって以来、「イベント中、もしも大地震が起こったら?」「大地震でイベントが中止になった時は?」などのマニュアルを必ず作るようになりました。



船橋市 20代 男性 アルバイト



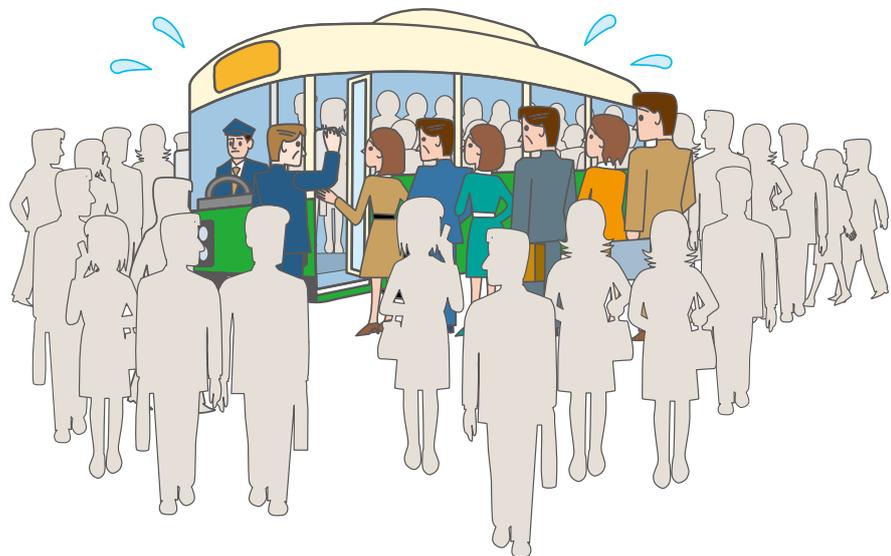
東京駅周辺は、危険を感じるほど大混乱

東日本大震災が起こった時、私は東京駅でバスを誘導するアルバイトをしていました。目の前の高層ビルが激しく揺れたこと、そして震災直後、東京駅の地下からワァ〜ッと多くの人が出てきたのを、よく覚えています。

気が付けば、東京駅周辺の歩道は人でいっぱいになり、まるで満員電車のよう。車道にも人が溢れていました。今にして思えば、動き出したバスは始発の段階で満員となり、途中のバス停からは乗車ができない状況になったので、始発の多い東京駅のバスターミナルに人が押し寄せたのだと思います。

仕事を終え、「このままでは人の流れに巻き込まれて危険」と判断した私は、浅草橋にある派遣会社を目指しました。途中、携帯電話の充電が切れそうだったので、秋葉原の電気街で充電器を探しましたが、大型量販店はどこも人でごった返っていて、中に入ることすらままなりません。

そして困ったのがトイレ。ショッピングビルも大型家電量販店と同じ様に入れない状況で、コンビニにはトイレを待つ長い行列が。そこで私が頼ったのは警察。交番では快くトイレを貸してくれ、本当に助かりました。



船橋市 20代 男性 アルバイト



携帯電話のアプリで、電車の運行を確認

東京駅で震災に遭い、どうにか浅草橋にある派遣会社に到着したものの、JRも地下鉄も全く動かない。家が千葉県船橋市にある私は、会社で途方にくれていました。

「もう今日は帰れないかもしれない」、あきらめかけた私を救ってくれたのは、携帯電話のアプリ。それもリアルタイムで利用している乗客が、「○▽線が動いていますよ」と教えてくれるアプリでした。深夜0時過ぎ、電車が動いていることがわかり、ギューギュー詰めの各駅停車の電車に乗り、どうにか自宅に近い駅へ。着いた時間は、深夜1時30分ごろ。

しかしそこから自宅まで、まだおよそ2時間の道のりです。他にも歩いている人がいることに勇気をもらい、どうにか歩き切りました。

以来、「外出する時には、携帯電話の充電器を忘れない」「仕事先のそばに避難場所があるか確認する」「避難場所までのルートも確認する」を徹底しようと思うのですが、ついつい忘れがちに。駄目ですねえ。





急遽^{きょ}始めた携帯電話の充電サービスが大好評

東日本大震災が発生した3月11日、私は通信関係のイベントを運営する仕事で、新宿駅前のイベント会場にいました。その瞬間は、何が起きているのかよくわからず、揺れも「自分が疲れているから？」と錯覚したほどでした。

お客さんの安全確認をして、イベントは中止に。落下物が心配だったので建物から離れ、目の前にある巨大モニターで情報をチェックしていました。

鉄道も止まり、帰ることができないスタッフが何人もいたので、思いついたのが、「近所の大型ディスカウントショップで自転車を買って、帰ってもらおう」ということ。さっそくお店に走りましたが、タッチの差で売り切れ。

そこで目に付いたのが携帯電話の情報を頼りに、家路に急ぐ人たちの姿。そもそも通信系のイベントだったこともあり、代理店の人、制作の人たちと話し合い、「このスペースを携帯電話の充電ができるコーナーにしよう」と話がまとまりました。

今度は、近所の家電量販店廻りです。こうして20台ほどの充電器を購入。夜7時頃から11時頃まで、充電サービスを行いました。人が絶えることはなく、20台の充電器はフル稼働。多くの人たちから「ありがとう」「助かるわ」と感謝の言葉をいただきました。



川口市 40代 男性 会社員



次々と小さな目標を立てて歩く

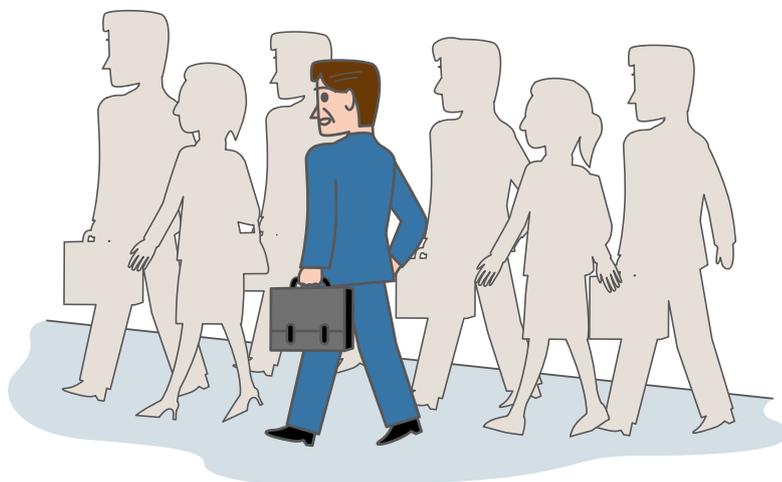
その瞬間は、赤坂にあるホテルの19階で、仕事の打ち合わせをしていました。「免震構造の建物は、これ位揺れるはず。まずは窓から離れて…」と、比較的落ち着いていました。

しばらくすると、ホテルの人から「建物の外へ出てください」と言われ、19階から1階まで歩いて下り、駐車場へ避難しました。

しかし時間ばかり過ぎていくので、午後5時頃、「そのうち電車が動きはじめるだろう」と信じ、歩いて帰ることを決意。よく地図を見ていたし、このあたりに土地勘もあったのです。いざ、歩き始めると、ヘルメットを被り、スリッパを履いたOLを数多く見かけました。ヒールのある靴だと、歩きづらいのですね。

途中でコンビニに寄り、トイレを借りたついでにペットボトルの水を買い、水分を補給しながら歩きました。また、携帯電話の地図を見ながら歩いていたのですが、途中でバッテリーが切れそうになり、地図を買おうと本屋さんにも寄りました。

途中の駅に着いた頃には、バスも動き始めていましたが、長蛇の列。しかも交通渋滞もひどく、いつ帰れるか見当もつきません。結局自宅のある川口まで歩くこと4時間。なんとか歩き切れたのは、「次はあの駅まで」「今度はあの通りまで」と、次々と小さな目標を設定して歩いたのが良かったんだと思います。



千葉県 50代 男性 会社員



「休んだら歩けなくなる」との恐怖で、ひたすら歩く

東京の会社で地震に遭い、自宅は千葉。距離にしておよそ60キロ。夕方5時30分に会社を出て、京葉道路を歩いて自宅に向かいました。歩道は歩いて帰る人でいっぱい。中にはハイキング気分で歩道いっぱいに広がって、話しながら歩いている人もいました。私は携帯ラジオを聴きながら、ただ黙々と歩いていました。

途中にある自転車屋さん、どこもお客さんでいっぱい。日も暮れ、市川あたりで懐中電灯を購入しました。歩きながら「どこで休憩しようか」と思い続けていましたが、「休んだら歩けなくなる」という思いもあり、とにかく歩き続けました。

西船橋駅近辺まで来たのが午後9時位。幕張の辺りでファーストフードのお店を見つけ、ようやく休憩をとったのが、深夜0時半頃。そして深夜3時半まで休憩し、「今から歩けば、途中で明るくなる」と、再び歩き始めましたが、体が冷えてしまうと駄目ですね、すぐに歩くペースがダウン。「どうしようか」と悩んでいた時、国道の上りが全く動いていないためユーターンして来たタクシーを捕まえる事ができました。結局家に着いたのは深夜4時30分頃。

「会社にそのままいても良かったのかもしれないな」と後で考えましたが、その時は「とにかく家族の安否が知りたい」と思い、家に帰ることしか考えていませんでした。



八街市 40代 男性 会社員



見知らぬ人と、励まし合いながら歩く

地震発生直後、揺れの程度から電車は動いていないと判断。勤務先の近くから成田空港へのリムジンバスが出ているので、これで帰ろうと考えました。しかし高速道路が通行止めであるとの情報を聞き、これも断念。近所のコンビニで食料と飲料水を確保して、いつ帰宅できるかオフィスで情報を確認していました。

夜になり地下鉄の運転が一部再開されたとの情報を確認し、帰宅を決意。夜10時過ぎに本八幡駅まで移動することができました。本八幡駅に到着したのは、深夜1時前。タクシーで自宅まで帰ろうと思い、タクシー乗り場で1時間ほど待ちましたが、タクシーは1台も来ません。そこで待っている最中に一緒になった人と船橋駅まで歩いて移動しました。1人だと心細い暗い道も、話し相手がいるおかげで、ずっと気が楽になりました。船橋駅に到着し、寒さをこらえて4時間待って、ようやく朝7時頃、タクシーで帰ることができました。

以前から帰宅困難が予想される場合には、職場等で待機することが奨励されていましたが、自宅や家族の様子が心配だと、いつ帰れるようになるかわからぬまま待機しなければならないのは、ずいぶん辛いことだと実感しました。



焼津市 30代 男性 観光バス運転手



一瞬、高速道路の崩落を覚悟

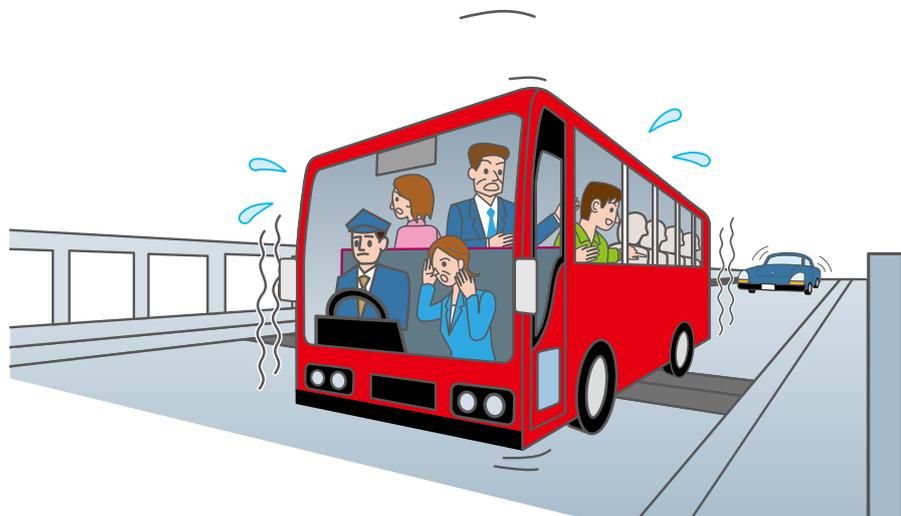
どうにかバスを停車させた場所は、橋の繋ぎ目だった

震災当日は、バス3台で成田空港から静岡市内の高校まで修学旅行の迎いの乗務に就いていました。震災の時刻は、修学旅行の学生さんたちが、まさに乗車している時。高速道路の料金所を出たところで大きく揺れ、どうにかバスを停車させた場所は橋の繋ぎ目。一瞬、橋が崩れるのを覚悟しました。

羽田空港付近まで進むことができましたが、途中で2回目の大きな揺れに遭遇。高速を降りて、その先は一般道を進むことになりました。しかし幹線道路は渋滞で全く動きません。おまけに日が暮れるにつれ、停電のため信号機や街灯が消えて、いっそう混乱をきたす状況に。

結局、川崎から横浜の中心部まで、約5時間。その先は東名高速が富士まで通行止めが解除になったとの情報があり、インターチェンジまで約3時間かけようやく高速に合流。しかしその先が大津波警報のため東名も国道もすべて通行止め。「これは、お手上げ」となり、途中のサービスエリアで夜を明かすことになりました。

翌日は新幹線が始発から運転再開され、お客様を三島駅で新幹線に乗せ、静岡に戻すことができました。しかし私を含む3台のバスは、何とかして会社に戻らなければなりません。「行けば通行止め」「行けば通行止め」の繰り返しの中、結局静岡に着いたのは、地震発生から約27時間後の午後6時半でした。



東京都北区 40代 男性 トラックドライバー



大渋滞で、救急車が立ち往生

マイカーの使用を控えるルール作りを

私は、トラックドライバーです。地震の発生は、大田区の得意先でトラックを停止した瞬間でした。サイドブレーキを掛け忘れたかと思う位、トラックが上下左右に揺れたのです。停電の中、どうにか配達を終え、川崎市内の会社に戻りましたが、ここからが本当の試練でした。

家が火事になっていないか心配で、マイカーで赤羽の自宅を目指したのです。もちろん首都高速は通行止め。沿道は、徒歩で帰宅される方、駅へ向かう方等で大渋滞。場所によっては、車道にはみ出している方も多数いました。信号は停電のため機能せず、車道も大渋滞。結局、地震の発生から家に着くまで、合計で12時間もかかりました。

今になって振り返ってみると、地震で全壊になったり全焼になったりしても、それはそれとして受け止めるべきだったと反省しています。私の様な行動のせいで、道路が渋滞したわけですし、そのせいで救急車等にも迷惑を掛けてしまいました。大地震発生時には、会社や公共施設で待機する、マイカーの使用は控える…などのルール作りを進めるべきだと思います。





東京都庁の33階で震災に遭遇

震災の日は、午後3時から東京都庁33階の会議室で会議の予定がありました。会議室に入り、まだ席に着くか着かないかのその時、地震がやってきました。

長く、大きく揺れ、壁や天井がキシキシと不気味に軋む音が続きました。天井からパラパラと粉状のものが落ちてきて肩にふりかかります。いつまでも、ゆらゆらと振動が収まらず、船酔いのような気分がしてきました。都庁の職員が会議室のドアを急いで開きます。会議室を仕切る移動式のパーティションが収納場所から今にも飛び出しそうになるのを、必死で押さえています。外を見ると周辺の高層ビルも同じようにユサユサ揺れているのがわかりました。そして湾岸方向では、黒煙が。

館内放送で「耐震構造の建物なので倒壊の心配はありません。エレベーターは使用しないでください」と放送があり、会議は予定通り開催されました。会議後は、非常階段で1階を目指します。途中で、下の階から汗を拭きながら上ってくる人と、何人かすれ違いました。

結局33階から下りてくるのに、20分くらいかかったと思います。1階に着いた頃には、膝は完全にガクガク。ふくらはぎは筋肉痛でした。



茅ヶ崎市 50代 男性 団体職員



体力に自信がなければ、無理な帰宅は慎むべき

地震から7時間が経過しても、まだ帰る手段が見つからず、私は東京都庁にいました。するとラジオで「地下鉄、私鉄が一部動き出した」とのニュースが。「どこまでなら帰れるか」いろいろ考えましたが、出た結論は、「行き当たりばったりでも、帰れるところまで帰ろう」というものでした。

最寄駅は大行列で改札制限中。いつ乗れるかわからない状況です。「すぐに乗れる路線はないか」と探して、なんとか電車に乗ることができました。そこから乗り継いで、藤沢駅に到着したのが翌朝の4時30分頃。

体力の限界を感じ、駅に掲示してあった一時避難場所の市民会館で毛布をもらい、しばし仮眠をとりました。コーヒー、パンをもらって一息ついて、朝7時過ぎに再び藤沢駅へ。電車は動いていましたが、すでに大混雑。バスも走り出しましたが長蛇の列で、並ぶ気力、乗り継いで帰る体力もありません。それでも8時15分にやっと電車が来て、20分位かかって自宅近くの駅に。

「なるべく早く一時避難場所に移動し、そこにとどまるべし。無理して帰宅するのは、無駄に体力を消耗するのみ」……これが、私が得た教訓です。





パニック障害を抱え、大混雑の電車で帰宅

港区のオフィスで震災に遭いました。テレビやラジオで情報を収集することもなく、普通に午後6時まで仕事を続けました。電車が止まり、帰れないことがわかった時には、あとの祭りです。

夜10時30分頃、大江戸線が動いたと聞き、麻布十番駅へ。駅はそれほど混んでいませんが、来る電車はすべて満員状態。パニック障害がある私には、とても乗れない状態でした。仕方なく反対方向に乗車。大江戸線は環状運転をしているから、グルッと遠回りをして帰れることは帰れるのです。

パニック障害が出てどうにかなるよう、ペットボトルとチョコをカバンに入れていました。しかし電車の中は、買い物に出ていると思われる赤ちゃんを連れのお母さんもいるのに、ギリギリの混雑状態。自分の精神も不安になり、泣きそうでした。

深夜1時30分頃に自宅近くの駅に着くと、駅前の地図をじっと見つめている人を何人も見かけます。きっと大江戸線しか動いていないので、とりあえず乗ってきた人が、徒歩で帰る方向を見ていたのだと思います。その人たちは無事に帰れたのか…家に帰っても心配で、なかなか眠れませんでした。



相模原市 30代 男性 会社員



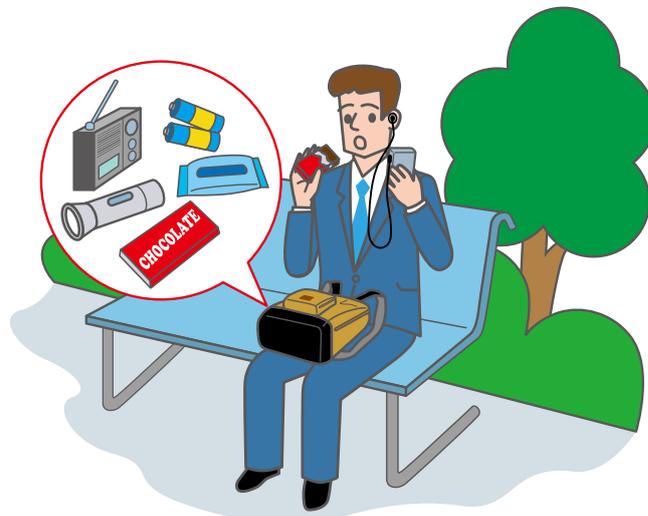
過去の災害番組で得た情報が大活躍

地震発生時、私は厚木市にいました。職業訓練中に、今まで経験したことのない揺れがビル内を襲いました。「これはただ事じゃない」と直感し、慌てて携帯ラジオをつけると、東北地方が大変なことになっているのわかりました。

訓練は中断、帰宅となったわけですが、「電車が動いているわけがない」と思い、歩いて帰ることを決意しました。距離にして10キロくらいですが、私にはいくつかの「情報ツール」や「知識」があったので、意外と冷静に乗り切ることができました。

まずは携帯ラジオ。いつも常備していたので、最新情報に困ることはありませんでした。また、地域の細かい内容は、コミュニティFMにチューナーを合わせ、確認しました。そして帰るルートですが、以前に車で走ったことのある道だったので覚えていました。外出にはリュックサックを使っていたので両手が使えましたし、リュックの中には「まさか」に備えて電池式の充電器や電池、LEDの懐中電灯を忍ばせていました。また、ウェットティッシュも役に立ったし、旅行の癖からか、お菓子も少し入れていたのでチョコレートがやけに美味しく感じました。そして帰宅の目安時間を多めに取り、コンビニや公園で休憩を挟みながら帰りました。結局4時間ほどで帰れました。

このような知識の中には、阪神淡路大震災の際の番組や、毎年放送される災害情報番組で教えられたことも多いんですよ。





私が帰宅難民となつて、気が付いたこと

被災した時は仕事場に留まる

私は蒲田のビルの16階で地震に遭いました。夕方に品川で打ち合わせがあったので、歩いて品川に向かいましたが、途中で打ち合わせ中止のメールが。帰宅するか迷いましたが、宿泊できるほど現金を持っていなかったため、歩いて帰ることを決断しました。

途中、スーパーで水と食料と軍手を購入して、帰路に着きました。夜8時位に大森を出て、国道1号線を歩き続けましたが、駅から離れると何も情報が入ってきません。私は携帯ラジオで情報を得ていましたが、歩いている人は不安がっていました。それに道路沿いにトイレがないことも気になりました。長蛇の列のコンビニを除けば、たまたま通りかかった公園内にトイレがあるくらい。特に女性は大変そうでした。

それからハイヒール、ブーツのまま歩いて、足をひきずって歩いている女性が意外と多いことにも気が付きました。普段から歩きやすい靴を用意しておいたほうがいいですね。

そして歩道のない道が増えてくると、道のどちら側を歩いたらいいか判らない人が多いことも気になりました。また、会社ぐるみで歩いて帰っているグループをいくつか見ましたが、ぺちゃくちゃ喋りながら歩道一杯になって歩いている集団も。前から人も歩いてきますし、後ろからも歩くペースの早い人もいます。非常に邪魔でした。

どうにかこうにか、私が自宅に着いたのは、深夜2時半位。

この経験を教訓に、私の経営する会社では「仕事場に歩きやすい靴を置いておく」「直接被災した場合には仕事場に留まる」…この2点を守るように指示を出しました。



川口市 40代 男性 会社員



本社の避難場所を知らず、皆に迷惑を

地震に遭ったのは、会社の健康診断で東京の御徒町にある診療所に行った帰り、時間に余裕があったので、本社のある神田まで歩いている途中でした。信号機が凄く揺れ、近くの高層ビルも、窓がガタガタ音を立てていました。通行中のおばさんが、腰が抜けたように座り込んで、周りの人たちに介抱されていました。

揺れが収まったので再び本社に向けて歩き始めましたが、持っていた携帯ラジオで続々と情報が入り、鉄道が止まっていることがわかりました。神田駅近くの交差点の中央からは、水道水が噴水のように溢れています。また壁やガラスが落下したビルもあり、迂回を命じられることも。

午後4時になんとか本社に到着しましたが、会社のドアがロックされています。「きっと避難場所に避難しているんだろう」と思いましたが、私は避難場所がわかりません。川口の勤務先に確認しようとしたのですが、公衆電話には長い行列が。なんとか避難場所がわかり、1人遅れて到着したのは、午後4時30分過ぎ。社員全員の安全が確認されないと、帰宅命令が出ない会社もあるようです。それでは他の人の迷惑にもなりますもんね。

本社や他の支社の避難場所、皆さんは知っていますか？



川口市 40代 男性 会社員



今、流行のゼリー飲料は、非常食にもおススメ

午後4時半頃、神田にある会社から帰宅命令が出ましたが、心配なのは、品川の小学校に通う子供のこと。そこで、歩いて品川を目指しました。途中で寄ったコンビニには既にパンはなく、バナナ、チョコレート、今流行のバランス栄養食、ゼリー飲料を購入。特にゼリー飲料は、喉の渇きも潤してくれ、「大いに使える」と思いました。

夜8時半頃、やっと学校に到着。先生に「お父さんも泊まっていけば」と言われ、避難袋(乾パン、水など)を渡され、子供達と一緒に教室に宿泊しました。本当は子供のために、コンビニでいろいろ買い込んでいたのですが、子供達全員に行き届きそうもないので、乾パン、水で我慢しました。しかし、乾パンは美味しくない上に、喉も乾きます。改めて「非常食にゼリー飲料は有効だなあ」と思っていました。

夜10時には消灯となりましたが、その後も揺れがあり、子供達は興奮して寝られませんでした。翌朝は、先生方が用意してくれた塩おむすびが1人1個ずつ支給され、私も頂きました。



横浜市 20代 男性 会社員



土地勘のない場所では、携帯電話のナビだけが頼り

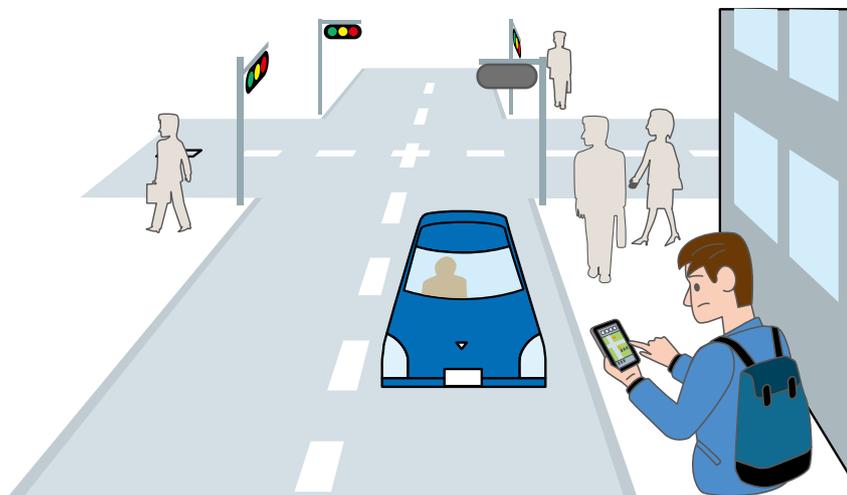
震災の日は、4月から勤める会社の研修で、朝から東京タワー近くのビルにいました。余震も続いたので、外に避難しましたが、周りのビルの窓ガラスが落ち、粉々に割れているのが目に留まりました。揺れも収まり、会社に戻りましたが、歩いて帰れる人は、次々と会社を出ていきます。

私は、会社初日ということで、このあたりに土地勘がなく、どう帰ったらいいかわからぬまま、夜10時半頃、とりあえず会社を出ました。目指すは、中目黒に住む友人の家です。

多くの人が歩いているのですが、その流れは、どこに向かうものか見当もつかず、バス停の行く先や道路標識を見ても「中目黒」と書いてあるわけでもなく、頼りになるのは携帯電話のナビだけ。ナビの示す最短ルートは、日比谷線沿いの道。全く人が通らない細い道もありましたが、ちょっとでもナビのルートを外れる心の余裕がありません。

途中、無料でお茶や食べ物を配っている個人商店と遭遇。勇気をもらい、3時間ほど歩いて中目黒へ。結局、電車が動いていることがわかり、友人の家には寄らず、電車で帰りました。

携帯電話のナビには、本当に助けられました。もし携帯電話の電源が切れたら、その場にうずくまって動けなかったと思います。





電車の中で大地震と遭遇

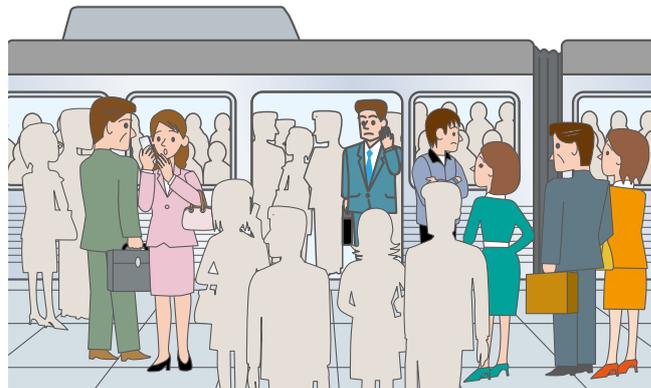
浦安での打ち合わせを終え京葉線に乗り、もうすぐ東京駅に着く…というタイミングで、地震に遭いました。電車は止まり、「ただ今、地震がありました」とアナウンスがりましたが、電車では地震の大きさもわからず、「大したことはないだろう」と思っていました。

そのまま電車の中で20分位待機。しかし皆冷静で、車内は落ち着いた雰囲気です。先頭の1両だけホームに入っていたので、車内を移動しホームに出ましたが、それも皆順番を守り、パニックに陥る様子はありません。

改札を出て地上に上がったところで、再び余震が。東京駅のそばで建設中のビルのクレーンが激しく揺れていました。携帯電話のナビを見ながら、知人のいる田町を目指しました。1時間半で到着。知人のオフィスはビルの8階。非常階段を上ると、壁がひび割れ、壁の建築資材がパラパラと落ちています。「ビルが崩壊しないかなあ」と少し心配に。ビルの中では「津波が来るかもしれないので、移動は控えてください」とアナウンスがりましたが、午後5時頃田町を出発。1時間半位で赤坂の自分の会社に到着しました。

そして深夜2時、Twitter^{*}の「電車が動いている」との情報を頼りに、会社を出発し、そこから自宅まで帰りました。電車が動き出すのを待っていた人達が、すでに帰路についた後の時間だったので、混雑は大したことはありませんでした。電車から降りる時には、思わず車掌さんに「ありがとうございます」と声をかけてしまいました。

* Twitterとは、web上に公開されている、140文字以内の短い投稿(ツイート)を入力して、みんなで情報を共有する無料のサービス。



横浜市 40代 男性 会社員



液状化現象を津波と勘違い

震災の日、私は浦安のホテルで、宴会場の音響・照明をコーディネートする仕事をしていました。

地震の瞬間は、まさにパーティーの真っ最中。急いで会場に駆けつけると、再び余震が。「近くのテーブルの下に隠れてください」と大声を張り上げ、機材を押さえました。

「お客さんをどうするか、早くジャッジをして」とホテルにお願いしましたが、なかなかアナウンスがありません。結局「いったん外に出てください」と指示があり、お客さん共々外に避難しました。すでにワンセグで東北の津波の事を知り、「外は危険なのでは？」と詰め寄りましたが、判断が覆ることはありません。

あたりを見渡すと、街灯が4~5本倒れ、バス停も倒れています。また駐車場からは、噴水のように水が噴き出しているところがあり、それもどンドン水の量が増えている感じでした。後で液状化が原因とわかりましたが、この時は「これも津波の影響か」と思い、再びホテルへ逃げ込んでしまいました。



東京都杉並区 40代 男性 自営業



遠くに住む第三者を介して家族の安否確認を

私の会社は東京にある築33年のビルの5階。地震の瞬間は、地震そのものへの恐怖と、ビルへの不安、2つの恐怖がありました。

杉並区にある我が家には、妻、そして3歳と生まれたばかりの子供がいるので、歩いて帰ろうと思いましたが、その時です。大阪から出張中の友人から「今晚泊めてくれ」と電話が入りました。

私は帰宅をあきらめ、友人のため、コンビニに買い出しに行きました。近くの通りは、歩いて家を目指す人でごった返し、10人に1人位は防災ずきんにリュック。その備えの良さに感心してしまいました。

その後、埼玉県に住む友人からも「泊めてくれ」と電話があり、震災の夜を男3人で明かすことになりました。

そうそう、午後5時頃買い出しに外に出たら、歩いている人が「〇〇で、事故があったらしいぞ」と話し合っていました。正確な情報も、不正確なことも含めて、クチコミの早さに感心。また電話がつながりにくい中、震災と関係のない地方にはすぐに繋がったので、遠くに住む人に自分の安否を伝え、そこに妻が電話する・・・など、「遠くに住む人を介して安否確認をするのも有効だなあ」と感じました。



町田市 60代 男性 会社員



病院のベッドで地震を迎える

震災の瞬間、実は私は病院のベッドの上にはいました。1月から市内の病院に入院していたのです。10階建ての8階にあった私の病室はかなり揺れましたが、看護師さんや医師が各部屋を声掛けしながら扉を開いて回り、その迅速な行動に「偉いなあ」と感心して見ていました。

病院はすぐに停電に。オレンジの非常灯だけの明かりです。もちろんテレビの情報も入りません。薄暗い中、夕食を済ませ、外を見ると街中が真っ暗。信号も止まっているようです。

一番心配したのは家族の安否でしたが、夜9時半頃、受付に連絡が入ったようで、「全員無事です」の報に一安心。看護師さんから地震や津波に関する情報も教えてもらい、そんなに不安を感じることはなかったです。

退院した今、気になることは、「もしも自分が都内にいる時に大地震が起きたら、歩いて帰る体力があるか」ということ。「一度、訓練をしなくちゃなあ」と心に決めつつ、まだ実現できていません。



小林市 70代 男性 写真家



あつたら良かった防塵ゴーグル

今も舞う無数の灰

私はその日、公園で運動をしとったんですが、山から噴煙が上がってるのを見て急いで家に戻りカメラを持って山が良く見える場所まで車で出かけたんですよ。すでに何人か来ておられたんですが、女性の方が恐怖で震えておられたのが印象的でした。

それから何度か灰の降る中を運転したんですが、視界が20~30メートルくらいしかなくて危なっかしくてですね。フロントガラスを痛めるのでワイパーも使えないし、フィルターも詰まるし、大変でしたよ。

自宅の方は、噴石や灰の被害は無かったのですが、今でも天気の良い日は葉っぱについた灰が舞って目が痛いですよ。避難所にはマスクやらがたくさん届けられたけれども、一緒に防塵用のゴーグルなんかもあったら良かったと思います。



高原町 40代 女性 主婦



慣れないことばかりの避難所生活

洗濯物にも一苦労

その日はドドーンと、ものすごい地鳴りがして、家全体がガタガタと音を立てて震えました。山から近い場所に住んでいて、1ヵ月くらい前から異変に気づいていたので、すぐに噴火だと分かりました。

避難所に入り、そこで10日間くらい生活しました。避難所での生活はシャワー室も1つしかなく、食事も簡素なものだったりでストレスがたまりました。中には不眠になる人なんかもいて。

避難所でインフルエンザが発生した時はヒヤっとしましたね。抵抗力のない子供や、お年寄りもたくさんいましたから。発症の疑いがある人は個室に隔離したり、役場の早急な判断に助けられました。

洗濯物も大変で、町のコインランドリーには長い行列が出来ていました。

避難が解除されても、山は活動を続けていて私の住む地域は今でも小さな灰が降っています。ですから、それからは洗濯物はずっと家の中で乾かしています。

もし、次に大きな噴火があって避難生活が始まって困らないように、家の一室には避難時に必要となる毛布や衣類などをたくさん用意しています。



高原町 60代 女性 野菜直売所職員



認知症の母と離れて避難

もしもの時に備えよう

店が閉まると同時に私も避難生活に入りました。母と2人で暮らしているのですが、母は認知症を患っているため、避難所での生活はとても無理と思い、私は娘の所、母は妹の所に身を寄せました。避難所で大勢の方との共同生活ですし、トイレの使い勝手も違うので、ずっと付き添っていないといけませんからね。

娘は団地住まいなものですから、飼っている犬を連れて行くことができず、ちよくちよく餌をやりに戻っていました。それでも、散歩には連れて行けませんし、親戚が預かってくれるまでは不安でした。

お店の状態も気がかりでした。灰が降るくらいならまだ良いのですが、もし雨が降ってしまったら近くの川が氾濫して土石流が起こると言われていましたので。幸い、取り越し苦労で済みましたが、雨が降っていたらと思うとゾッとします。

被災して感じたことは、お金のありがたさ。もしもの時を考え、それからは節約するようになりました。



都城市 60代 男性 運転教習所職員



鹿児島から来た作業車のおかげですぐに使えた主要道路

受けた恩を東日本の被災地へ

私は職場まで電車で通勤しとるんですが、レールの上に灰が溜まってしまったもんで帰りの電車が不通になってしまったんですよ。幸い、道路は鹿児島からの作業車がいち早く駆けつけてくれて使える状態でしたから、車で迎えに来てもらったりして無事に帰ることができました。

あの時は鹿児島からの作業車や、ボランティアの人たちの助けが大きかったですね。あの助けがなかったら、こちら辺の主要な道路はしばらく使えなかったかも知れんですからね。

受けた恩っていうのは忘れられないもので、東日本の震災の時はうちからも職員が3人、復興支援隊として自主的にボランティアに行ったんですよ。

今回の噴火で学んだことは、災害では常に最悪のことを想定しておかないといけないということ。今まで起きなかったから大丈夫っっちゃう考えでは、まさかの事態に行動が起こせんとですよ。



高原町 60代 男性 消防団団長



近所の人の声かけが一番！

消防団員は避難の呼びかけと地域の見回りで大忙し

新燃岳が噴火するのを見たのは昭和34年と今回ので二度目なんですが、あの時は水蒸気爆発だったので噴煙ちゅうのはあがらなかったとです。なので、今回の噴火で火柱ちゅうのを見た時は、ガタガタと足が震えましたよ。

消防団の団長をしとるもんですから、噴火から1ヵ月間は家に帰る間もなく慌しく動いておりました。

避難区域の住民に避難を呼びかけるんですが、中には応じてくれない人も何人かいますね。避難勧告でなく、拘束力のある避難指示だったらすんなり動いてくれたんでしょうけれども。高齢化の進んでおる地域ですから、行政が言っても聞かん人も多いんですわ。近所の人「危ねえから、逃ぐっど」が一番効果的でした。

その他に、警察と一緒に避難区域の見回りなどをしましたよ。悲しいかな、避難中に空き巣などを企てる不届き者が現れるのも災害時の特徴ですからね。



都城市 50代 男性 学校関係者



1ヵ月かかった灰の除去

支援のありがたさを実感

その日は学校で研究会を予定しちゃったんですよ。午後3時15分くらいですかね、山からモクモクと噴煙が上がっちゃるのが見えたんですわ。そうしたら突然、シャーという音がしだしましてね。校舎の窓ガラスに灰が降り注ぐ音だったんです。昼間なのに外はだんだん薄暗くなってくるし。これはただ事じゃないと、残っている生徒の親御さんに連絡して大至急迎えに来てもらいました。家に帰っても、山からはグワグワと不気味な音が聞こえてきますし、生きた心地がせんかったですね。

次の日、教育委員会から視察に来られたんですが、その時に2回目の爆発的な噴火が起こりまして、ただちに臨時休校を決定したわけです。

積もった灰の除去には1ヵ月くらいかかりました。ボランティアで全国に3台しかないバキュームカーが駆けつけてくれて、一日かけて中庭の灰を取り除いてくれました。マスクなんかの支援物資もたくさん頂きまして、日本人の優しさに感動しましたよ。



高原町 40代 女性 主婦



子供の安全を第一に

登下校時の噴火に備え、避難場所を学校が確保

うちには小学校3年生と幼稚園の年長の子供がいるのですが、噴石の恐れがあるので学校や幼稚園へは、車で送り迎えをしました。仕事の都合など色々ありますが、やはり子供の安全には代えられませんから。

学校からヘルメットが支給されましたが、高い所から落ちてくる石の衝撃は相当なものだと思うし、実際に屋根を破るような大きさの物もありましたから心配でした。

今は車での送迎はしていませんが、登下校時に噴火した場合の避難場所を学校が確保してくれたので、もしもの場合があっても安心かなと思っています。

子供たちは普段から大人たちに「気をつけんといかんよ」と言われているので、今では常に山の様子を見るようになりました。



都城市 50代 男性 学校関係者



噴火よりも土石流に警戒

梅雨前の灰の除去で不安をめぐう

こちら辺は1時間に5ミリの雨が降っただけで、避難勧告が出される地域なんです。近くの渓谷には一万年前に発生した土石流の地層も残っており、何年か前の集中豪雨では付近の地区で死者も出ております。

当時、そんな場所に7ミリくらいの灰が溜まっておったわけですから、噴火よりも土石流に対する警戒を強めとったですね。うちの体育館は避難場所にも指定されておるから、その準備にも奔走しました。今でも、体育館の中には毛布などを大量に用意しておりますよ。

梅雨までに行政が灰を取り除いてくれたおかげで何事もなく済みましたが、小さな集落ですから、地域の間だけで処理するには限界があるんですよ。やっぱり行政とか大きな所からの助けちゅうのは有難いもんですね。





今も続く噴火への警戒

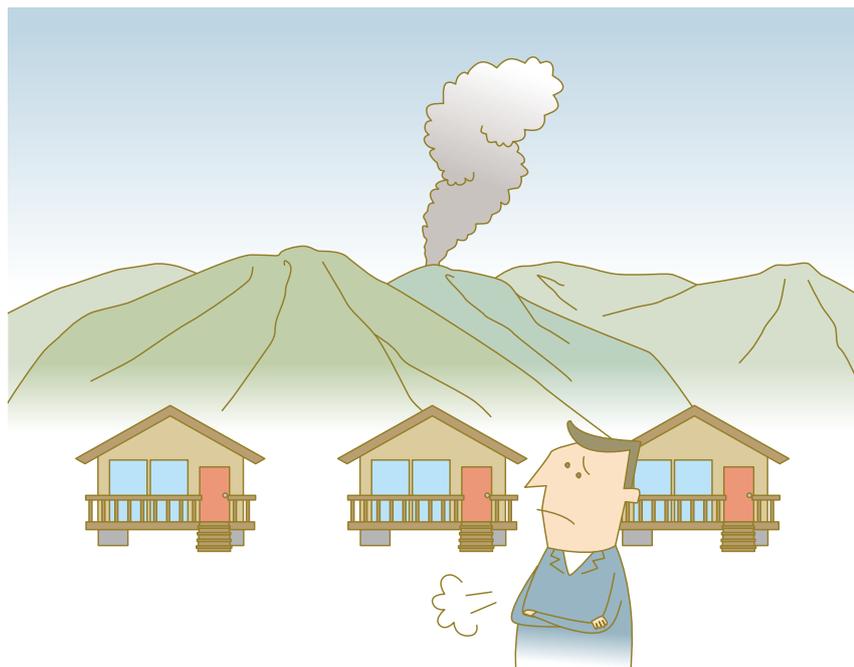
お客様の安全が第一

今も噴火は続いとるんですが、ウチの公園は山の下にあるもんだから噴火しても音が聞こえんとですよ。だから、もしお客さんがおる時に噴火したらどうしようかと思って。昼なら良いんだけど、夜だったら大変なことになってしまう。ウチは宿泊のお客さんもいて、家族連れが多いですからね。

お客さんから「今もやってますか、大丈夫ですか？」って電話をもらうんですけど、簡単に大丈夫ですよ、来て下さいとは言えんとですよ。

噴火っちゅうのは突然起こるもんですから、事前の準備が出来んですし、もしもの時に備えるっちゅうのは難しいと思ってます。

一応の準備として、新燃岳の見える地域の人間から何か異変があった場合はすぐに知らせてくれるよう頼んではおります。



高原町 30代 男性 肥育農家



牛舎の灰下ろしは地域の若者にまかせて

牛は知り合いの所に預かってもらう

うちの牛舎にも噴石が飛んできて、プラスチックのトタン屋根に2センチくらいの穴が何ヵ所か空いちゃったですね。修理もせにゃならんのですが、いつまた噴火があるか分からんので今はビニールシートで覆っとるくらいです。

牛舎の灰下ろしも自分とこと近所の畜産家んとこ、たくさんやりましたよ。自分のような若い人間がやらんと、もし年配者が落っこちたりでもしたら大変ですからね。

うちは避難区域からは外れておったけど、牛に何かあったらいかんと思って知り合いの所に連れて行きました。預かってもらうのだから当然、お金もかかりますよね。

あの時こうしておけば良かったというか、自分みたいな若い人間がもっと地域に残っておったら、色々な作業がもっとスムーズにできたかも知れせんね。





畜産農家を悩ます土壌汚染

例年と違う稲のでき

この地域には畜産農家がたくさんあるのですが、あの時はJAと協力してこの辺の和牛360頭を隣の市の畜産市場に避難させました。若い世代が残っておればいいんですが、やはり高齢化が進んでおるもので、農家も年寄りばかりでしょう。それはもう大変でしたよ。口蹄疫の避難が済んでからすぐの避難でしたからね。

数軒ですが、畜産をやめてしまった農家もありました。受難が続いたものから、それも仕方ないのかも知れませんね。

米や畑作もやりよつとですが、田んぼや畑に灰が積もってしまったもので、土壌の性質が変わってしまったですね。刈取った稲は、頭の方が黒ずんで、穂の先も少しおかしいのが出来ました。

表面的な被害は済んでも、土壌にどんな影響を与えたかちゅうのはこの先を見てもないと、まだはっきりとしたことは分らないですね。



高原町 60代 女性 野菜直売所職員

店舗の提供をうけ、販売を続ける

洗っても落ちない葉もの野菜について

お店が避難区域に指定された時はどうしようかと思いました。野菜は生ものですから置いておくわけにもいけません。そうしたら、宮崎市内にあるお店が「うちの店舗を使って」と申し出てくられて、その日の朝に職員みんなでそちらに商品を移動させ、そこで販売させてもらいました。ありがたくて涙が出る思いでした。

お店には毎日、30件くらい野菜の持ち込みがあるんですが、大根やサトイモなどの根もの以外の野菜は全て食べられない状態になってしまいました。灰は粒子が細かいので、葉に刺さり、水でどんなに洗い流しても取り除くことができないんです。葉ものを専門に扱う農家さんたちは噴火によって収入がゼロになってしまったんですよ。可哀そうで、かける言葉も見つかりませんでした。

ようやく、全てが元通りになったのは9月に入ってからです。それまでは店の前の道路に灰が舞い、県外からのお客さんもほとんどいらっしゃいませんでした。本当に長かったです。





とつぜん襲った地鳴りや窓を揺らす空振^{※1}

「安心して」と利用者へ声かけ

午後3時くらいだったでしょうか。利用者さんが「新燃岳が噴火した」と教えてくれまして。外を見るとモクモクとした噴煙がこちらにどンドン迫ってくるのが見えたんです。

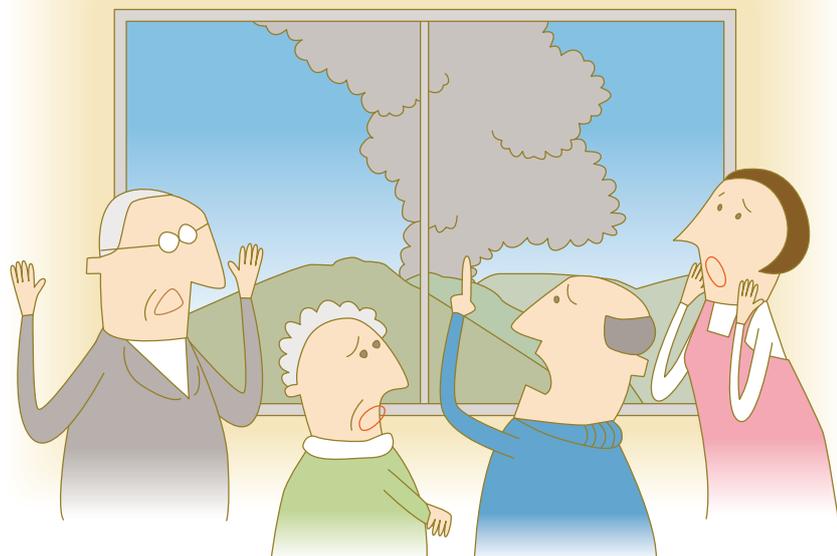
その日の深夜、地鳴りと共に窓ガラスがガタガタと揺れ始め、30名以上の方が起きてこられました。地鳴りや空振^{※1}も恐ろしいものでしたが、火口付近で立ち上がる火柱や噴雷はこの世の光景とは思えない異様なものでした。

利用者さんの中には、帽子やバッグを身につけ、不安な面持ちで一夜を過ごされた方もいました。「この建物は鉄筋やっで、頑丈よ。安心しやいね」と、職員みんなで声かけをして安心してもらいました。

激しい空振^{※1}はその日だけでしたが、しばらくの間は園内のガラス全てに保護フィルム^{※2}が貼られました。

※1 空振とは、爆発や噴火などで起こる大気の振動のこと。

※2 ガラス飛散防止フィルムのこと。



小林市 30代 男性 自動車販売業



灰で新車が台無しに

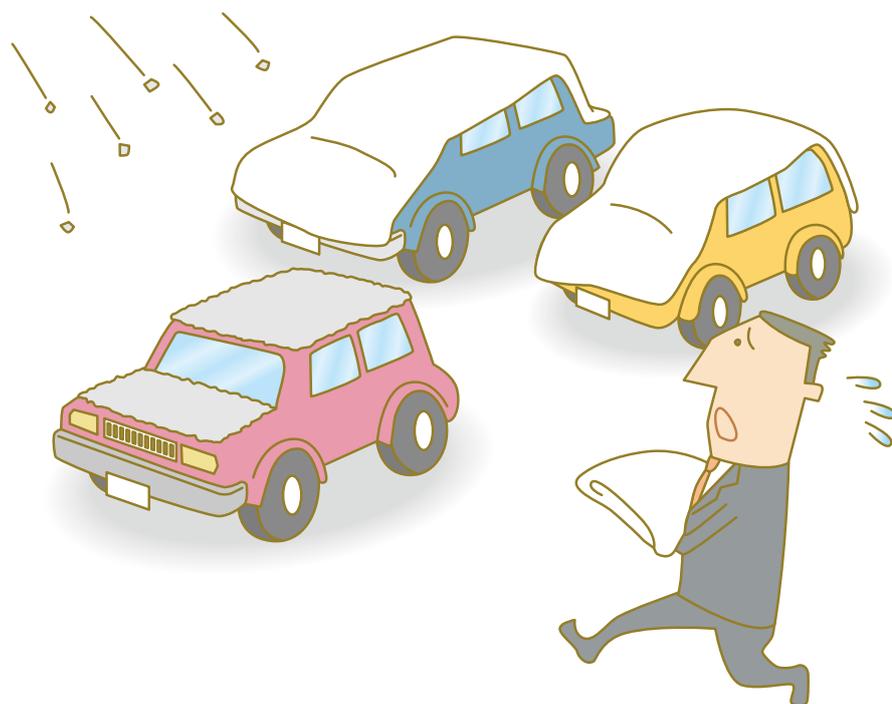
毛布をかけて被害を防ぐ

噴火の翌日、店に行くと展示してある車に大量の灰が積もっていました。灰は付いただけで車に傷を付けてしまうので、新車や新古車は売り物にならなくなり会社は大損害を受けてしまいました。

もちろん、お客様からお預かりしている車にも灰は積もりました。お客様にお詫びの電話を入れると、「天災ですから仕方ない」とおっしゃってくださる方もいましたが、屋根のある所に保管しておいて欲しかったとおっしゃるお客様もいて申し訳ない思いでいっぱいになりました。

それからは会社で大量の毛布を購入し、帰宅する前に全ての車に毛布をかける作業をはじめました。そのおかげで灰による被害を防ぐことができました。

私自身も、噴火の後は車を車庫に入れるようになりました。



小林市 30代 男性 自動車販売業



保険がおりない天災での被害

保険特約に入っておらず約10万円を自己負担

新燃岳から近い位置にあるため、灰よりも噴石の被害が甚大で、噴火から2日で約300枚のガラスを手配しました。ガラスの交換作業はそんなにあるものではないので、社内だけでは追いつかず、他県にも応援を要請しました。全ての車のガラスを交換するまでかかった期間はおよそ1ヵ月。その間はお客様への代車の手配などの業務も加わりますから、通常では考えられないほど忙しい日々が続きました。

ガラスの値段は、軽自動車でも約10万円。天災では特約に入っていない限り、保険がおりません。ガラスにヒビが入ると車検を通すことが出来ないため、交換は絶対なんですね。車が無いと移動が困難な地域ですから、お客様にとっては痛い出費になりました。

お客様の中には、次の噴火に備えてカバーなどの保護具を購入される方もいらっしゃいました。



高原町 50代 男性 公園管理者



真っ白になった勤務先

8人で50日頑張った灰集めはトラック30台以上

噴火からしばらくしてから灰が降り出しました。この公園は避難区域に入っているものですから、その期間は営業が出来んわけですよ。ちよくちよくは様子を見に来てましたけど、だんだんと灰で真っ白になっていく公園を見た時は辛かったですよ。

公園までの道には灰が埃のように舞ってましてね、それで道路が見えんです。昼間なのにライトを点けて車を運転しました。歩道を歩いている人の姿などは見えんですから、危なかったですよ。

避難が解除されてから職員8人で灰集めの作業を始めたんですが、これが50日かかりました。運んだ灰の数は、トラックで30台以上になりました。

お祭りのある4月までにはなんとか終わらせようと、朝から晩まで一生懸命に作業をしました。営業が再開出来た時は嬉しかったですね。



高原町 30代 男性 養護老人ホーム職員



窓を締め切つての生活

灰とともにウイルスの恐怖も

噴火からしばらくは、庭にも建物にも灰が積もった状態で、利用者さんはとても外出できる状態ではありませんでした。灰を集めるのに職員だけでは人手が不足、ボランティアの方にも手伝ってもらってようやく完了しました。集めた灰を土のう袋に詰めるのですが、全部で400以上はあったと思います。その間は園内の窓も締め切っていましたので、換気も出来ない状態でしたね。

同じ頃、町内の避難所ではインフルエンザが発生してしまい、そこに避難していたうちの職員の家族も発症してしまったんです。もしもの時を考え、その職員にはしばらくの間休んでもらいました。徹底した管理の甲斐あって、園では体調を崩される利用者さんは出ませんでした。



都城市 60代 男性 運転教習所職員



ア
ス
フ
ア
ル
ト
を
覆
っ
た
灰
は
土
の
う
ー
〇
〇
〇
〇
個
分

延期された二輪車教習

噴火の翌朝「灰が積もってます」と職員から連絡を受けたんです。とても教習は出来んじゃろと思ひよったら、職員が総出で早朝からほうきを使って作業をしてくれまして。そのおかげで自動車の教習はいつも通りに行えました。

2回目の噴火でもまた大量に灰が降りましてね。センターラインはもちろん、道路のアスファルトも見えんくらいですよ。そうしたら、鹿児島から作業車が10台くらい入ってくれて路上の教習も予定通りにできたんですわ。

自動車は大丈夫でも、二輪車の教習は危なくて出来んかったですね。アスファルトの間に少しでも灰があると車輪が滑るんですよ。小規模な噴火が何回も続きましたので、結局、二輪車の教習を再開したのは3ヵ月経ってからだったですね。

まさか噴火するなんて夢にも思っておりませんでした。想定外の出来事だったわけです。今後の対策として、100万円くらいする中古の清掃車を購入しました。

敷地が広いもんで、約1000個くらいの土のうが出来上がりましたよ。それはそれはもう大変な作業でした。



高原町 30代 男性 役場職員



過去にもあつた大噴火

また住めなくなるのかも…

新燃岳は300年前にも大噴火を起こしていて、その時にはこの地域から2年間も人が離れたんです。だから、最初の噴火で町に灰が積もったのを見た時は、もう終わりだと思いました。車が行き来するたびに灰が舞い上がり、太陽が出ているのに外はどんよりと薄暗く、信号は見えても、道路のセンターラインは確認できず……。こんなことになってしまった故郷を前にして自然と涙が出ました。

技術も発達し、交通網も整備され安定した生活が送れていますけど、自然の力を前にしたら人間は無力なんだと痛感しましたよ。

災害が起こった時は自分の命は自分で守らないと仕方がないんですね。噴火もそうだし、東日本の震災もあって物の見方がガラリと変わりました。

大規模な噴火こそ起こらないけれども、まだ依然として活動を続けているわけですから、もし最悪の場合が起こったときは住めなくなるかもしれない。そんな覚悟で生活していますよ。



高原町 30代 男性 役場職員



普段の繋がりがスムーズな避難に

県外からくる人の対応に苦労

大規模な避難は初めての経験でノウハウも無かったのですが、普段から「向こう三軒両隣」の付き合いをしている地域ですから、安否確認や避難所への誘導、情報の伝達などを住民自ら行ってくれたおかげで、大きな混乱も起こらずスムーズに対応できました。

噴火があつてからの2ヵ月間、町には約2000人のボランティアが入ってくれました。米や水、防寒具なんかの支援も助かりましたね。

困ったのは、県外から来る報道関係の人間ですね。当時、口蹄疫の発生でも色々苦労をした時期なのに、県外からドカドカと大勢の人間がルールを無視して踏み込んでくるもんですから。地元の人には本気で怒っていました。でも、こちらでも伝えるべき情報などもありますので、一概に出て行けとも言えない状況でした。





停電で浄化槽が使えず、道の駅のトイレへ

車の通り道をみんなで雪かき

家の前が坂道になっていますが、12月31日の夜には雪が重く、すでに雪かきができるような状態ではありませんでした。みんなが通れるよう、新しく降り積もった雪を踏み固めたりしていました。その後、テレビで紅白歌合戦を見ようと思っていたら停電。浄化槽がポンプアップできなくなり、満杯になり蓋が浮き上がってきたので、トイレが使えなくなりました。

当時、他の家族が県外からいろいろ来ていて、わが家は十数名という大所帯でした。トイレは、道の駅のものを使わせてもらおうということになり、バス道に出るまでの道をみんなで雪かきをして、車を出せるようにしました。

雪害に関して言えば、外出している際は、市内のビジネスホテルや親せき宅などへの避難を考えることも大事ですね。降ることがわかっていたら話ですが。



松江市 60代 女性 公民館長

停電と断水も工夫で乗り切る

石油ストーブ、カセットコンロ、湯たんぽ、山の水が大活躍

12月31日の朝、近所の方から「お宅は電気きてる？」と聞かれました。周辺はどことも電気がきてなくて、電力会社へ電話することにしました。しかし、いっこうに繋がりません。みんなで何十回とかけ、やっと繋がりました。電力会社も、こんな事態は想定してなかったと思います。

その日から1月3日の夜7時ごろまで、4日間停電しました。うちはオール電化なので、電気がないと、お正月準備もできません。31日の夜は、深夜電力で温められたお湯が使えましたが、それ以降は使えませんでした。

納屋から石油ストーブを捜し出してきて、お湯を沸かして湯たんぽで暖をとったりしました。カセットコンロも使いました。お正月前で、たくさん買い物をしていたので助かりました。

断水もしていたので、トイレに流す水は山から水を汲んで使いました。ただ凍りついていたので、溜めるのが大変でした。コンビニで何でも買える時代ですが、今回の経験で、工夫することの大切さを実感しました。





過去の大雪ではなかった倒木被害

里山の整備が急務

大晦日は大雪で、元旦には私が住む平地でも40センチメートルくらい、山の方では80~90センチメートルくらい積もっていたようです。湿った重い雪で、木々にすごく着雪していました。

昭和46年2月に豪雪がありまして、松江市市街地でも80センチメートルの積雪を記録しました。その時と降り方が似ていましたね。ただ当時との違いは、里山の手入れが十分になされていなかったことです。夜中にバーンと大きな音が出て、朝になって見てみると、直径30センチメートルくらいの木が根っ子から倒れているんですよ。もう景色が一変するくらい、あちこちが目茶苦茶になっていました。100本近くの竹が折れ、道路をふさいだ地区もありました。倒れた木や竹は、チェーンソーを持ち寄り、住民で片づけました。

豪雪の被害を少なくするためには、日ごろから里山を整備しておくことも重要ではないでしょうか。地権者の方にも気をつけてもらわなくてはなりませんね。また、そのための道具の確保も必要です。



松江市 60代 男性 自治会役員



車が通れない真っ白な坂道

消防団員が医療用酸素ポンペを徒歩で届けた

この集落には、持病で医療用の酸素ポンペを使用している人がいました。集落から県道に出るには上り坂を約700メートルのぼらなくてはなりません。そこを上がるのにも、除雪が間に合わず、車では上がれない。高圧線の鉄塔や山の木々が倒れるような雪の降り方でしたからね。結局、その距離を消防団が歩いて運びました。普通に歩けば30分くらいですが、あの日は大変だったと思いますよ。何しろ一面真っ白で、道がわからない状況でしたから。県道だけをきれいに除雪してもらっても、私たちはこの地区から出ることができないのです。ちなみにその酸素ポンペが必要だった方は無事でした。

今回の雪害を機に、この地区にも除雪機を1台配置してもらうことになっています。雪害があつてからすぐに県と市町村の話し合いがあり、幹線道路から家々まで除雪の順番を決めたようです。



松江市 60代 女性 公民館長



声かけや水配りで安否を確認

非常時に心強い、ご近所さんの存在

公民館長をしていますので、1月2日から公民館に来ていましたが、除雪依頼の電話や停電、断水の電話がジャンジャンかかってきました。雪が深くて行けないような場所でも、電話で状況がわかったり、安否確認ができればいいのですが、電話が不通な所や携帯電話を持っていない方とは連絡がとれず、なかなか全体を把握することができませんでした。

非常時には、隣近所の人同士で安否確認をすることが大切です。雪かきに出てきていないお宅には、声かけなどをしていました。また、断水している地域には背負子^{*}で水を運びましたが、水を配りながら安否確認をしました。孤立感が深まる中、自分たちのことを認識してくれていることが、大きな安堵感に繋がったのではないのでしょうか。

私の家の隣に透析を受けている人がいまして、うちの息子が雪のデコボコ道を車で病院まで送っていったということがありました。今回の雪害では、ご近所さんを心強く感じた人が多かったのではないのでしょうか。

*荷物を背中に背負って運搬するための竹などで編んだ籠のこと。





電話が通じず、頼りの消火栓も雪の中

火事の対応に手間取る

平成23年1月2日の午後2時半頃、「火事だ！」と自治会長の私の所へ人が飛んできました。しかし、停電で外部とは連絡が取れず、集落の有線放送も使えない。携帯電話もほとんど圏外でつながらないので、人員を招集するのが大変でした。

家はすでに燃え上がっていました。中に人がいたのですが、壁の方から燃えていったので、火が大きくなるまで気づかなかったようです。オール電化住宅で暖房が使えず、豆炭こたつを使用していましたが、その炭が火元とのことです。

消防車が来るまで、消火器や消火栓で対処していました。しかし、消火栓はみな道路の下にあり、雪が積もっていて場所もわかりませんでした。消防団が雪かきをしましたが、屋根から落ちてきた雪でまた埋まってしまう状態で…。年寄りだけの家は、雪かきをしていないこともあり、仕方ないですね。遠くにある消火栓からホースをつないで消火活動をしました。その日が無風状態だったことが、不幸中の幸いです。



安来市 50代 男性 市役所職員



命を救ったご近所づきあい

改めて実感するお付き合いの大切さ

このあたりの地域性なのかもしれませんが、このあたりでは顔見知りが多いです。今回の豪雪でも、日ごろのお付き合いのおかげで、尊い命が救われました。

ある人が、近所のお宅の前を通りかかったところ、軽トラックのライトがつかっぱなしになっているのを見つけたんです。「この人は、そんなことをする人じゃないけれどもなあ?」と思い、様子を見に行ったら、なんと家の人が屋根から落ちてきた雪に埋もれていました。すでに低体温症に陥っていたそうです。気づかれなければ、亡くなっていたと思います。顔が見えるお付き合いの大切さを、あらためて実感させられる出来事でした。



安来市 40代 男性 運輸会社社員



両車線を塞いでしまった雪のこわさ

数十台の車をレッカー移動

前日から降り積もった雪で道路はアイスバーン状態でした。

坂で路線バスが横滑りして、両車線を塞いでしまったと連絡が入ったので、レッカー車のタイヤにチェーンを巻いて救出に向かいました。見かけたバスは、ほとんどチェーンを巻いていなかったですね。

バスを動かしたけど、その後ろで止まっていた車は降り続く大雪で動けない状態だし、対向車も前に進めない状態で、止まっていた車は運転手だけを残し、他の人がコンビニに食料や飲み物などを歩いて買いにいっている状態でした。作業中、僕らが外から見たときにはコンビニの棚は空の状態でした。

あっちへ行ったり、こっちに行ったり、徹夜で「もういいわ、当分レッカーしたくない」というくらい動きました。何台車を動かしたか数えてはいないけど、数十台の車両をレッカー車で動かしました。

止まっている車の中には人が乗っていない放置車両もあって、放置していくのはいいけど鍵は付けてほしいですね。動かせるようになったときに困りますから。



安来市 40代 男性 運輸会社社員



帰省、買い物、初詣、物流トラック

大晦日の大雪ゆえ、被害も拡大

12月31日の昼から1月2日の朝まで、道路上で止まってしまった車の救援にあたりました。雪で高速道路が通行止めになると、このあたりは、国道1本しか道はありません。しかも年末なので、帰省する車や買い物に出かけた車、出雲大社への初詣客、さらには物流のトラックなどが、除雪されていない道路上に数多く立ち往生していました。単に滑って道の真中に停止しているのではなく、そういう車をかわした車が民家に突っ込みかけていたり、信号機に張りついていたり…という状況。なので、レッカー移動だけでなく、クレーンで吊り上げて、車を道路へ戻す作業も何度かありました。

昨今は公共事業が減り、土木・建築関係の会社の設備が縮小しているので、除雪車もリースをしている会社が多いらしいです。必要な時だけ借りられるのは合理的ですが、今回の豪雪はリース会社も年末年始で休業しており、駐車場にあるだけで役に立てられない除雪車がたくさんあったという話も聞きました。



安来市 60代 男性 建設会社役員



仕事柄、天気や波の情報には過敏なのに

「着雪」情報、聞きもらす

当社では現場での作業が中心なので、安全面を考慮した教育をつねに心がけています。また万一の災害に備え、社内の緊急連絡網を用意するとともに、各現場の安全確保や避難などについても指導を行っています。今回は、年末年始の休業中の豪雪であり、対象物が転覆船や沈没船の引き上げでしたが、迅速な対応ができたと思います。

私どもは海の仕事をしているので、天気や波の情報については、陸の業者より過敏になっています。それにより、今日は仕事ができる、できないという判断をします。しかし、温暖化の影響でしょうか、雪が年々減少する中、注意報や警報は出ていましたが、少し油断があったように思います。「着雪」については、あまり意識して情報を聞いていませんでした。今後、公共機関の情報として、地域で暮らす人や働く人に密着したピンポイントの予報を発表していくのも、よいのではないかと思います。



松江市 40代 男性 電力会社社員



次々と道路に止まる車の救助に追われ、停電の現場までたどり着けず

雪の対応は毎年恒例だったので、いつもと同じような準備をして現場へ向かいました。しかし、今回は今までと勝手が違い、夕方から晩にかけ、あちこちから停電の連絡が入ってきました。道路は、大晦日で初詣へ向かう車が多いのに加え、雪の装備をしていない車が次々と止まってしまう状況。スコップなどを常備している私たちは、車をどかしたりしていましたが、行けども行けども車が止まっていて…。配電線の故障処理よりも、車を救助して回らざるをえませんでした。

夜中になり、ガソリンも無くなってきたのに気づいたので、営業所に帰ることにしました。しかし、単線の道を大きな車がスリップしてふさいでしまい、通り抜けることができませんでした。

ガソリンの残量を示す針が「E」の所まで来ていたので心配でした。幸いガソリンは朝までもちましたが、もっと早くに対処しておけばよかったというのが反省点です。



松江市 40代 男性 電力会社社員



装備や訓練に活かされた過去の教訓

全員一丸となって早期送電を実施

以前起きた災害をきっかけに、各営業所ではスノーシュー^{*}などを準備するとともに、雪道に対する知識を蓄えていたことが、今回の雪害で活かされたと思います。また、折れた電柱からの送電など、応急復旧の教育を普段からやっていたことで、復旧レベルが向上していました。このことにより、復旧作業は迅速かつ安全にできたと思います。

私は、12月31日の夜に要請を受け、正月早々、帰省していた大田市から松江の営業所に出社しました。大田市は雪が全く無かったため、松江市内の積雪状況には大変驚きました。自家用車で営業所に向かいましたが、渋滞のため営業所に辿り着くまで相当の時間を要する中、途中で立ち往生してしまうのではないかと不安と、何としてでも営業所に向かいたいという思いでした。

営業所に到着後は支援班として、社員たちの食事や宿舎の手配、営業所の除雪作業などを行っていました。雪は日が経つにつれ重みを増します。それを運んだり、置いておくスペースを確保するのが大変でした。また、応援で集まってくる方々のために、普段の災害とは違い、立体駐車場を探したり、現地でオーバーヒートした復旧車両を引き取りに行くことも仕事でした。全員が一丸となり、1分1秒でも早く電気を繋げたいという思いがあったから、この雪害を乗り越えられたのだと思います。

^{*}靴につけ雪上を歩くための道具。日本のかんじきに似ているが、かんじきほど落ちず歩きやすい。





脱輪した乗用車は、普通タイヤを履いた県外ナンバー

ナビ頼りの脇道も危険

この時期、普通タイヤで走るのだけはやめてほしいですね。今回に限らず、脱輪などのレッカー移動に行くと、普通タイヤの人が本当に多い。そのほとんどが県外ナンバーの車です。

普通タイヤに装着できる簡単なチェーンがありますが、それで高速道路を70~80キロメートルで走ると、片方が外れてバランスを崩し、滑りやすくなります。スピードが速いと、とても危険です。金属のチェーンでも、50~60キロメートルが限界。けっこう横滑りもしますしね。また雪がないところを走ると、切れやすくなります。雪道に慣れていない方には、そういった知識も不足しています。

地元の間は、通っても大丈夫な脇道を知っていますが、県外の人がナビに従い、除雪されていない脇道に入り、ハマってしまうというケースもよくありましたね。

それと目についたのが、四輪駆動車の脱輪です。車の性能を過信してしまっているからか、無理をするんでしょうね。四駆は4本のタイヤが全部いっしょに滑りだすと、もう止められません。



松江市 50代 男性 電力会社社員



停電のお知らせや復旧の見込みを広報車で伝えるが

有線放送や防災無線、停電エリアでは機能せず

停電が広範囲で、お客さまからの問い合わせが殺到したため、年末年始で帰省中の社員の呼び出しや他事業所および本社からの応援も受け対応にあたりました。

停電が長引くにつれ、お客さまからの問い合わせ件数も増加。現場からは復旧見込みがたたないとの連絡を受けていたため、お客さまからは大変厳しいご意見をいただき、対応には大変苦慮しました。

停電状況のお知らせや復旧見込みについて、多くの方に情報を伝えようと広報車を出しましたが、幹線道路が渋滞で立ち往生。車を呼び止められ、詰め寄られる場面もありました。また、行政機関の有線放送や防災無線も使わせていただきましたが、停電中のエリアでは機器が使用できず、情報が十分に行き届きませんでした。

今後は、停電が長引く状況の中で、どのような方法で情報を伝達していくのか検討が必要だと考えています。



松江市 50代 男性 電力会社社員



電気を届けられないなら、それに代わる物資を

支援班がストーブや灯油を届ける

平成23年1月1日の早朝に停電した特別養護老人ホームから、「入所者が大部屋に集まり、湯たんぽで暖をとっている。高齢の方々の体調が心配なので、何とかしてほしい」という連絡を受けました。そこで、私どもの支援班がストーブや灯油を用意し、運ぶことにしました。これらの物資は、ホームセンターでも品切れでしたが、なんとか調達することができました。

しかし、物資を運ぶのが、また大変で。施設の近くまでは車で行けたのですが、最後の約200メートルの上り坂は、社員が荷物を担いで上りました。

停電の復旧まで丸1日かかったので、施設のみなさんから喜ばれ、後からお礼の電話や手紙をいただきました。

お客さまの身になれば、いつ復旧するかわからない状態は不安です。特に、高齢者がいる施設ではなおさらです。こうした対応をすべてのケースにできるわけではありませんが、精いっぱいのができてよかったと思います。



安来市 60代 男性 建設会社役員



海に油が漏れだすおそれが

やすぎ

安来港で転覆船・沈没船の引き上げを実施

私どもの会社は、防波堤や離岸堤、岸壁などの海上土木を専門としています。安来港には自社の作業船を停めていますが、大雪で船がどうなっているかが心配で、正月3日に従業員が見に行きました。船外機を付けた船が傾いていると、翌日引き上げることに。5~6人が出て、船を自社のクレーン船で吊り上げました。まわりを見ると、他にも雪の重みで傾いたり、ひっくり返ったり、沈んでいる船もありました。だいたい5トン未満の船でしたね。放っておけば、海に油が漏れだすおそれもありました。当社は安来市と災害時応援協定を結んでいるので、海上保安部の許可をもらい、すぐに引き上げにかかりました。

船の中には水が入っていて、そのまま吊り上げると、船が破損してしまいます。まずは潜水士が潜り、船が壊れない位置を探してワイヤーを掛け、元の向きに直します。そして、中の水のある程度抜き、船体が浮いてきてから、ワイヤーで陸に吊り上げるという作業をしました。合計で5隻を引き上げました。



安来市 50代 男性 市役所職員



災害時要援護者^{*}の安否確認で、心肺停止状態の高齢者を発見

腰のあたりまで雪に埋もれながら、歩いて役所へ来ました。まずは災害時要援護者^{*}の安否確認をすることとなり、民生委員さんに連絡網で電話をかけてもらいました。電話が通じた場所はいいのですが、そうでない場所へは、雪の中を歩いて回ってもらいました。この地域の民生委員は、お年寄りの方が多いので、大変だったと思います。災害時要援護者は約3000人いますから、どうしても行けない場所もあったようで、次の日までかかりました。

一軒だけ「電気がついているが、新聞が溜まっている」という一人暮らしの方がいました。パトカー等で向かったところ、家の中で倒れており、すでに心肺停止状態。その後、米子市の病院に向かいましたが、渋滞が尋常でない。1時間くらいかかり搬送されました。残念ながら亡くなられたのですが、もし安否確認をしていなかったら、雪の状態が峠を越え、普通に生活ができるようになってからの発見になったと思います。安否確認の重要性を認識しました。

^{*}一般的に高齢者、障がい者、外国人、乳幼児、妊婦等、災害時に一人で避難が難しい方のこと。





分庁方式と班編成で、職員を効率的に配置

持久戦に備え、入れ替え制で作業を進行

今回の雪害には、ほぼ全職員で対応にあたりました。安来市では合併に際し、いろいろと考えまして、分庁方式をとっています。そして、勤務時間内と時間外に分けて職員を班編成しています。時間外の場合は、勤務する庁舎ではなく、職員が住んでいる地域で班を編成し、招集がかかった時は、最寄りの庁舎で対応することになっています。また、被害の状況によっては応援要請を出し、職員を融通することもありました。活動班にもかなり招集をかけましたので、ほぼ総動員だったと思います。

ただ100%の職員が対応にあたった場合、持久戦になるともたないので、常時6~7割の人員を活動に当てて、入れ替え制にして作業を進めていきました。





放置された車が引き起こした大渋滞

持ち主はパニック

峠の頂上付近に軽自動車が放置され、交互通行になっていました。警察に持ち主を照会してもらい、本人に役所へ連絡するようお願いしました。すると、若い女性から電話がありました。どうやら普通タイヤで走行していた峠の山頂付近で動かなくなってしまい、どうすることもできなくなり車を置いてきてしまったそうです。

こちらでレッカーするけど、緊急時の移動なので、車体にキズがつく可能性があることを了承してほしいと言うと、「困ります！明日も仕事で使うからダメです！」と…まあ、こんな具合で押し問答になりまして。結局、現場の方でエイヤッと対応したんですけどね。

翌日、車の持ち主から、「昨日は申し訳ありませんでした」と、別人のような感じで電話がありました。同一人物だと気づかず、「どちら様ですか？」と尋ねたくらいです。自分ではどうにもできない状況だったうえに、役所や警察からいろいろ言われ、おそらくパニックになったんでしょうね。



安来市 50代 男性 市役所職員



万に備え、救急ルートの確保と応援協定の締結が急務

今回の雪害は、昭和38年の豪雪と積雪量はさほど変わらないかもしれませんが。しかし当時は、こんなに車が多くなかったので、被害としては今回の方がはるかに大きいのではないのでしょうか。

たくさんの車が幹線道路に止まり、迂回路も除雪が十分でない。そんな状況の中で、病人やけが人が出た時の救急搬送が心配でした。また、この状況が何日も続くと、人工透析を受けているような方々の不安も大きかったと思います。救急ルートの確保や優先順位などを決めることが、今後の課題です。

また、災害時にすぐに営業してもらえるように、多くのガソリンスタンドと応援協定を結ばせていただきました。国道沿いのパチンコ店には、待機場所として使わせてもらえるよう提携を交渉しているところです。



一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

東京YWCA 運営委員長 池上 三喜子

一日前プロジェクトの物語をお読みいただいて、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

自然災害に遭遇して体験したことや感じたことなどを語り継ぐことは、災害体験者や被災者の重要な使命であると言えるでしょう。なぜなら、多くの市民は被災経験や災害体験を持たないため、災害に事前に備えることの大切さを頭で理解はしていても、実際に自分が被災したらどうなるかをイメージできず、何から始めたらよいのかが分からないのです。

災害体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃいます。その方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうことが多々ありますが、ここでご紹介する一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

一日前プロジェクトでは、被災された方々のさまざまな「思い」や「本音」を物語にして、災害体験・被災体験を持たない人たちに、災害が身近で、恐ろしいものであることに気づいてもらうことを本来の目的としています。今年度は、災害時に強いAMラジオ網を活用して現地密着型の取材を行ったり、東日本大震災で起きた帰宅困難者事象などもエピソードとして取り上げております。

一日前プロジェクトで作られた物語は、研修やワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部として使うこともできます。文字だけでなく、添えられている気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともありますし、ホームページでエピソードを紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法のポイントを以下にまとめましたので、参考にしてください。

※詳しくは、内閣府のホームページ <http://www.bousai.go.jp/km/imp/index.html>をご参照ください。

物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2～4人集まっていただいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出して再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても振り返って取り上げることもできます。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。ただ、減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話の切り分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにします。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう?」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

これまで、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探す聞き取りを実施してきました。今年度からは、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すために、聞き取りの場をさらに増やそうと、聞き取りの担い手を増やす試みも始めています。

災害列島である日本では、不幸なことに毎年のように災害が発生します。その体験は、同じように見えても、一人一人にとっては厳しい経験です。その過程で辛い思いをした被災した人々の声を、一日前プロジェクトとして継続的に後世に伝えていくために、物語を聞き取る場を作り続けていきたいと思います。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

簡単な手順を紹介します

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

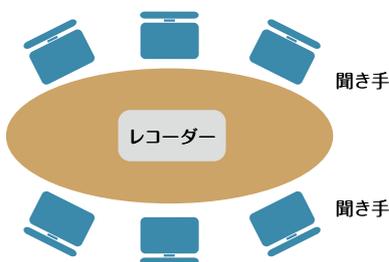
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集 ※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したい
- 日頃から何を準備しておけばよかった

といったお話を聞かせていただき、そこから導き出される教訓や身につまされるお話を小さなエピソードにとりまとめる活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた約650の物語は、内閣府の「被害者を軽減する国民運動のページ」<http://www.bousai.go.jp/km/>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください！きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどご自由にお使いいただけます。

「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<http://www.bousai.go.jp/km/>)からダウンロードしてください。

■発行 内閣府(防災担当)

〒100-8969
東京都千代田区霞が関1-2-2(中央合同庁舎第5号館)
Tel:03-3503-9394 web:<http://www.bousai.go.jp>